

蕾の悦虐

女優裏潮未



原 案 W I L L 様
小説化 濠 門 長 恭

目次

街金からの借金.....	- 3 -
ロストバージン.....	- 8 -
アナルバージン.....	- 32 -
野外でさつえい.....	- 49 -
積極的な口止め.....	- 73 -
ムチとロウソク.....	- 88 -
父も学校もイヤ.....	- 119 -
赤ちゃんタトウ.....	- 130 -
永遠のうら女優.....	- 155 -
ワンニャン物語.....	- 163 -
オモチャ第1号.....	- 181 -
後書き.....	- 187 -

この小説はフィクションです。登場する人物、組織、地名、事件、年齢は架空のものであり、実在する如何なる事象とも関係はありません。

註記：この小説では、固有名詞以外は5年生までの教育漢字のみを使っています。あくまでもリーダビリティを考慮したもので、他意はあります。

漢字を制限したために、当て字を多用しています。

価値→価直 豪快→号快 親不孝→親不考 紹介→照会

興味津々→興味深々 描く→絵書く 伴う→共なう 違和感→岩感

その他多数。

「暴発」は、文脈によってはバクハツの当て字の場合もあります。

主人公は「まだしも」を「まだもし」と「感じがいい」していたりします。

重要：作品中では、ロリコンに対する偏見なども書かれていますが、当時の「世間常識」を反映したものです。断じて、筆者の見解ではありません。

街金からの借金

「ネズミーランドってさ、乗物もすごいけどパレード。あれが、他の遊園地にはないんだ。まるきり、アニメの世界が日本へ引っこしてきたみたいでさ」

「ネズミーっていえば、ファニコンのボバイも面白いね」

「ボバイはネズミーじゃないよ」

また、今日もネズミーとファニコンでもり上がってる。どっちも、今年の新規開店。夏休みに連れてってもらった（カセットを買ってもらった）子ども多い。けど、新学期になって10日が過ぎたんだよ。いい加減で別の話題に移ろうよ。集団登校のときはあまりおしゃべりしないのに、集団下校は男子もまざっての歩くいどばた会議だな。

おしゃべりに花がさいているうちに、解散場所の公園に着いた。

「さようなら、ユウお兄ちゃん」

「こら、また。お姉ちゃんでしょ。ごめんなさい、しなさい」

6年生のリーダーがしかってくれたけど、あたしは気にしない。いつものことだ。

「良いよ。車と知らない小父さんに気をつけて帰るのよ。また明日ね」

とは言ったけど。内心は、ちょっとモヤモヤ。

下級生は、あたしのことを「お兄ちゃん」てよぶ子が多い。かと思えば。

「お姉様ってよんで良いですか？」なんて告白してくるませた（何故か）女子もいたりする。

あたしの名前は浦^{うらが}上^{みゆ}由羽。耳で聞くだけでなく字でも、男か女か分かりにくいけど。ちゃんとスカートをはいてるんだよ。

といっても。同級生の女子からは「パンツが見えてるよ」って注意されない日がないくらいだけど。鉄ぼうだけじゃなく、教室でも足をとじてすわるのが苦手だし、男子の目の

前につくえに乗ったりするものな。でも、スカートの下からパンツが見えるってのは、女の子の証固だよ——というのは、置いといて。

つくえに乗ったのは、オテンバじゃないよ。セミが迷いこんで来たから、つかまえてにがしてやったんだ。男子ったら、輪ゴムの指鉄ぼうで「対空しゃげき」なんていじめてたから。義を見てせざるは勇無きだろ。

だいたい。スカートじゃなくて半ズボンをはいてたって、あたしはちゃんと女の子に見えるはず。ぽつぽつ、オッパイもふくらんできてるし、かみの毛はちゃんとかたまでとどいてるし、言葉使いだって気をつけてるのに。

ケンカで男子を泣かすことはあっても、泣いたことはないけど。それは……エへへと笑ってごまかす。

公園から家までは五分。

あたしはお財布から家のカギを出して。どうかしまってますようにと……あーあ、開いてた。パパは、お仕事をさがしもせずに……どうか、真っ昼間からお酒なんか飲んでいませんように。

2年前にママがなくなってから、パパはフヌケになってしまった。あたしだって、四十九日が明けたら、天国と仏団から見てるママを悲しませないようにと、がんばってきたのに。

パパったら、パチンコに現実とうひして、負けを取りもどすんだと言って、競馬に何万円って注ぎこんで、自転車もモーターボートも。なんで、平日の昼間に開さいしてるのかな。会社をサボってまで。とうとうクビになっちゃった。それでも、すぐにビンボウになったわけじゃない。どころか、マイホームのローンをくり上げて返し終わってる。

それは、ものすごく皮肉なことに、ママのおかげだった。ママはトラックにはねられて死んだ。運送会社からばいしょう金がもらえたとし、生命保険もあった。

何億円、何兆円もらったって、ママは帰って来ない。あたしたちの悲しみはうまらない。そして、そのお金のせいで、パパはフヌケになった。

「ただいま。パパ、いるの？」

げん関からリビングへ直行して。

「……………??」

パパは、いた。ソファーセットの1人用のイスに、しょぼんとすわってた。

向かい側の3人用の長イスには、どっかのプロ野球チームのユニフォームみたいな、はでなタテジマのスーツを着た……あたしにだって、カタギじゃないとひと目で分かる小父さんがふんぞり返ってる。そのソファーの両側に、皮ジャンのチンピラっぽい人が立っている。子分なのかな。ボディガードなのかな。

「おい、浦上よ」

タテジマスーツの小父さんが、パパに向かってあごをしゃくった。

パパは、あたしに向き直って。

「由羽……すまない」

いきなりパパに謝られても、何の事が分からないよ。

パパが言葉につまっていると、タテジマスーツの小父さんがあたしに向かって話しかけてきた。

「きみのお父さんはね、うちの会社——ヤハギ・ファイナンスにざっと500万円の借金があってね」

ヤハギって、聞いたことある。ていうか、この街の人ならだれでも知っている。ヤクザ屋さんだ。

タテジマスーツの小父さん、ああめんどくさい。両側が子分ばいから、きっとこの人は親分だ。その親分が、とんでもないことを言った。

「借金を返せないって言うから、この家を引きわたしてもらってチャラにするんだよ。むずかしい言葉で言うと、タンポケンの行使だ。きみたち親子には、3日以内に立ち退いてもらいたいんだよ」

「……………?!?」

クリビッテンギョーだなんて、バカ言ってる場合じゃない。

このクソバカ親父。

そうか。ママの生命保険もばいしょう金も、とっくに使いこんで。また負けたとかわめいて酒食らってて。それでも給食費とかはきちんとおさめてくれてたし、電気もガスも水道もテレビも電話も止まってないのは……借金だったんだ。

だけど、500万円って、あたしなんかには想像もつかない金額（お小使いの5千か月分……400年分以上！）だけど。家のローンのくり上げ返さいは1千万円だったと、パパが言ってた。

「この家の価値は500万円より、ずっと高いはずです。チャラにするなんて、サギじゃないですか」

親分がほほ笑んだ……んじゃなくて、苦笑かな。

「なるほど。こいつは、おまえなんかの手には負えそうにねえな」

パパに声をかけてから、またあたしに向かって話す。

「たしかに、この家の査定額は1千500万円くらいだ。だけど、そのねだんですぐに売れるわけじゃない。ところが、500万円の返さい期限は今日なんだよ。スーパーでも、売れ残りは半額にするだろ。それと同じことさ」

なんて言われても、なっとくできっこない。半額どころか3分の1じゃないの。ううん、金額の問題じゃない。

あたしは、この家で生まれて、この家で育った。パパ（は、どうでも良い）とママとの思い出がいっぱいつまった、たったひとつの家。それだけじゃない。この家は、ママの命と引き代えたようなもの。ママそのものだよ。

追い出されるなんて、絶っつつつつ対にイヤだ。

これからは、パパが心を入れ代えて、うんと働いて……なんて、期待できない。

「お願いします。4年待ってください。働けるようになったら、あたしがお金を返します。今からでもアルバイトを見つけて、少しでも返していきます」

親分はだまって電たくをテーブルの上に置いた。

「500万に年利の29.2パーセントをかけて、12か月でわると……」

121666.666

「毎月の利子が12万円。サラリーマンの初任給と同じくらいだね」

つまり。あたしがいくらがんばっても、お給料を全部わたしても、利子にしかないってことだ。

「そうだ。パパに仕事をさせてください。マグロ漁船とか山おくのダム工事とか、お金を使えなくて、お給料の高い仕事があるんでしょ」

ヤクザ屋さんなら、そういう所に人を送りこむ商売もしてるはず。

「由羽、おまえ……なんて、ことを?!」

ぶわはははと、親分が号快に笑った。笑いが止まらなくて、目をこすったりしてる。

「なんとも、親不考なムスメさんだな。こいつは、もう40を過ぎている。中年ホワイトカラーに、ドカタは務まらねえよ」

さて、そこで——と、親分が笑いを引っこめて、あたしの目を真正面からのぞきこんだ。

「おまえ、明日からでもアルバイトをする気はあるか?」

「はい。でも……毎月の利子だけでも12万円なんて、とても無理です」

新聞配達って、いくらもらえるんだろ。きっ茶店のウェイトレスとかは、学校があるから無理だし。

「たった1日で100万になるアルバイトを照会してやるよ」

ひゃ、100万円……?!

そんな美味しい話があるもんかと思って。すぐに、Hな方面だと思い当たった。トルコぶろとか、ピンクサロンだな。だけど、ああいうのは色気のあるボンキュッボンのお姉さんだよ。あたしみたいなガキには、パパのマグロ漁船以上に無理だろ。

「しかも、ビデオの女優としてデビューできるぞ」

あ、分かった。ロマンポルノってやつだ。Hなビデオだ。でも、あれだって、色気のあ

るボンキュッボンのお姉さんだろ。

「由羽、たのむ。この小父さんの世話してくれるビデオに出演してくれ」

泣きそうな顔で、パパにお願いされてしまった。

こんなしょうもない父親の願いなんて聞いてやりたくもないけど。でも、家を取られるのは、もっとイヤだ。100万円なら、5回出演したらチャラになるのか。

「でも……Hなビデオに出演してるなんて、同級生にも先生にも知られたくないし……」

きっぱりと断われない。気持ちがゆらいでる。

ドラマの演技なんてできるかなという心配は、さておいても、Hなビデオなんだから、ハダカもさつえいされるんだろうけれど、見られたって減るもんじゃなし。はずかしいのをガマンすれば、この家を取られずにすむ。

「それは、だいじょうぶだ」

親分が自信満々に受け合ってくれた。

「うらビデオだから、ビデオ屋なんかには出回らないよ」

それなら安心かな。

「分かりました。出演します」

家を取られたくない一心で、そう返事をしちゃったけど。ビデオ屋さんで売らないんだったら、どこで売るんだろう。そんな疑問がうかんだのは、親分たちが帰った後だった。

ロストバージン

Hなビデオに出演することになって。まるまるイヤってわけでもない。Hなことに興味がないわけでもないから。男子のパンツなんか見たくもないけど、その中身には興味がないこともないこともあるような。^{すぎながかなと}杉長奏斗くん、ぎゅっとだきしめられたりキスをされたりすることを考えると、むねがキュウンとなって、なぜかオマタがムズムズ……えへん、

えへん。

だけど、Hなビデオっていっても、ハダカをさつえいされるのは知ってるけど、その他にも何かするのか何をされるのか、実は良くわかってない。親分に聞いてみたけど。

「当日になったら分かるぜ。下手に事前の知識を持たない方が、反応が初々しくて良いんだな」

男子の間ではやってて、先生やPTAからは目の敵にされてる『まぼろしパンティ』というHなマンガがあるけど。あたしも、実はちょろっと読んだことがあるけど、あんなやつの実写版かな。パンティまでぬいで「おっぴろげ」とか、しなくちゃならないんだろうか。マンガは後ろ向きだけど、うらビデオってやつは、正面からさつえいされるのかな。うらなの表。なんてバカ言っておくちゃ……ううううう、はずかしいよお。なんて思いながら、興味深々だったりもする。

Hなことに興味があるのは、男子の先売特許じゃない。男子はチンチンが大きくなるとズボンの上から分かってしまうけど、女子はマンマンからちびったってスカートにまではしめないものね。

そして、いよいよ、出演の当日は土曜日。午後3時から夜までかけてさつえいして、よく日はゆっくり休めるようになって、気を使ってくれたんだ。

家まで親分が自家用車で向かえに来てくれた。3ナンバーの黒ぬりベンツ。先日にお共をしてた皮ジャンの子分のひとりが運転手をしてて、あたしはリアシートの親分の横にチョココンと乗った。

パパは父兄として付きそうつもりだったらしいけど、あたしが断固キョヒした。Hなことをしたりされたり現場を親に見られるのは、はずかしいというか、オマタのおくにムシズが走るよ。決してちびりはしない。

「ムスメがつっこまれるところを見たいなんざ、キチクだぜい」

親分もあたしの味方になってくれた。キチクって、なんだろう。ピーチクパーチクは知ってるけど。

「そうだ、まだ自個照会をしてなかったな。オレは矢^{やはぎふみちか}作文親。これでもヤハギ・ファイナンスの社長なんだよ」

あまりにあたしがだまりこくってるから、気を使ってくれたのかな。

だけど。ヤハギ・ファイナンスの社長で、名字が矢作なら——ヤクザ屋さんの本物の親分だ。でも、ちっともこわい感じじゃない。びしっと引きしまった体格でゲジゲジまゆ毛のホームベースみたいな顔だけど、野球選手みたいなふんいきなのは、顔のりんかくのせいかな。スーツがタテジマなのも関係してる？

車は街の外へ出て、原っぱにぽつんと建ってる西洋のおしろみみたいな所へ乗り入れた。ここって、アベックがHな事をするために入るホテルだ。あたしは、れん愛とかには興味がない（Hには興味がある）けど、それくらいは常識ってやつだよ。そして、あたしはアベックじゃないけど、Hなビデオのさつえいをされるんだから……やだ、今ごろになって、心ぞうが、バクバクしてきた。

車から下りて、目の前のキラキラしたドアを開けると……部屋をまちがえたんじゃないのかな。先客のアベックがいた。

「おつかれ様でツす」

アベックの男の方が、親分に向かって直立不動の最けい札。運転手をした人と同じ皮ジャン。たしか、この前も家に来てた人だ。女の人の方は、マット運動ができそうなくらいに大きいベッドにこしかけて足を組んで、親分ではなくあたしを……なんか、品定めしてるみたいな目つきだ。

「おう。さっそくだが、支度をしてやってくれ」

親分が女の人に、アゴで使うって感じじゃなくて、なれなれしく声をかけた。ヤクザにはオメカケさんが付き物だから、きっとこの人がそうなんだろう。

「それじゃ、ユウちゃんはとりあえずハダカになってちょうだい」

女の人が、さらっと、すごいことを言った。オトナの男の人が3人もいる目の前で……そうか、Hなビデオをさつえいするんだから、ハダカも当たり前なんだな。

だけど。ビデオカメラは、サイドテーブルの上に（2台も！）投げ出してあって、さつえいのふんいきじゃない。

「どうした。実の父親をタコ部屋に放りこめだなんて勇ましいことを言うくせに、自分はカラキシか？」

親分が鼻先で笑った。

くそ。ぬげば良いんだろ。母さんの家を守るためだ、ハダカだろうとおっぴろげだろうと、何だってやってやるさ。

スパパッと、いさぎよくぬいだ。ぬいで……くそ、なんできちんとたためないんだよ。指が言うことを聞いてくれない。

「かたしといてあげるから、ユウちゃんはこれを着てね」

女の人が、ベッドの上に下着とブラウスとジャンパースカートとブレザーをならべた。

なんだ。最初から着変えだと言ってよ。ちょっと安心して、下着を手にとって。

「……？」

これ、パンツじゃない。パンティだ。ものすごく小さくて、向こうがすけて見える。こんなものって、『まぼろしパンティ』だってはいってないぞ。

足を通して引き上げて。上がこしぼねにもとどかない。無理に引っ張り上げると、オマタに食いこんでくる。

「スキャンティはね、コシではくんじゃないの。ヒップではくのよ」

女の人言う意味は、すごくわかる。パンティの上のふちがヒップの丸みに引っかかって、それでずり落ちないようになってる。

でも、こんなのは着ている方が着ていないよりはずかしい。黒の下着なんて生まれて初めて身に着けたけど。はだかすけてる。オマタの布も二重になっていないから、ワレメまでくっきり見えてる。部屋のあちこちに大きな鏡があるので、自分のエッチなすがたが写ってはずかしい。

下着はもうひとつあって、ブラジャーだ。あたしには、まだ必要ないのに。

「着けたことがないの。お姉さんが手伝ってあげる」

女の人があたしの後ろでコシをかがめて、ブラジャーを着けてくれた。

くう、きつい……。むねがしめ付けられる。だけど、意地悪じゃないと分かる。ゆるゆるだと、ブラジャーのカップ（は付いてないけど）のところが、ブカブカになる、むねの肉をぎゅうぎゅうにしめ付けると、肉がカップの中になげこんで、やっとフィットして……。やだ、チクビがすけてる。だけじゃなくて、真冬におふろに入る前みたいに、固くしこってる。

パンティとブラジャーを着けたら、ハダ着はなくて、すぐにブラウス。その上からジャンパースカートを着て。最後にニーハイソックス。なんか、ちょっとお姉さんぽくなった気がする。でもスカートは短くて、全体としては子どもっぽい印象だ。

「なかなか可愛いぞ。馬子にも衣しょうってやつだ」

親分が茶化す。でも、そのおかげで、さっきから続いた心ぞうのバクバクが静まってきたかな。

「では、リハーサル無しの本番だ。ユウちゃんは、何も演技はしなくて良いよ。本当のことをしゃべってくれよ」

親分は、そう言ってくれるけど。Hなことに少し興味があるなんて……。質問されなきゃ答えなくて良いよね。

「それじゃ、そこへすわって」

ベッドのふちの、お姉さんがすわってたあたりを指差された。やけにまぶしいと思ったら、部屋のすみからスタンド式の照明が照らしている。

ちょこんと、こしかけて。何をされるんだろうって、ドギマギしていると。親分が右側にすわって、あたしのかたをだいた。アベックのかたわれの男の人と運転手さんとが、それぞれビデオを構えて、正面とななめ横から、あたしにレンズを向けた。

「きみの名前と年令を教えてくれるかな？」

親分が耳元にささやくような質問。ネコなで声って、こういうのを言うんだ。

こんなさつえいで本名をばらしても良いのかなと心配だったけど。ビデオ屋さんでは売られないって言葉を信じて、本当のことを言った。

「ということは、もうたん生日は過ぎているんだね」

「はい、九月生まれですから、ついこないだです」

オトナに囲まれてると、意識なくてもハダカとは関係なく、言葉使いはきん張する。

「どうして、ユウちゃんはうらビデオに出演する気になったんだね？」

「おやぶ……小父さんが、一番良く知ってるじゃないですか。パパの借金のカタに家から出て行け。それがイヤならうらビデオに出演しろって……」

「それじゃあ、イヤイヤ出演してるんだね？」

「はいッ」

いきなり、聞かれたくない質問をされて、反しゃ的に答え過ぎちゃった。

「それでも、家から追い出されないためには、何だってするんだね？」

「……ビルから飛び下りろとかは、イヤです。でも、この部屋の中でなら、何をされてもガマンします」

なんかへリクツばい返事かな。なんて反省してるヒマもなかった。

いきなりかたをガッチリおさえこまれて、親分の顔が目の前にせまってきた。

「んむうう……」

キスをされた。あたしのファーストキス。こんな小父さんに、うばわれちゃった。

どころじゃない。なに、これ……ヌメヌメした物がくちびるをわって、歯のすき間から進入してきた。ベロだ。こういうの、フレンチキスっていうんだっけ。青いレモンの味がるキスじゃなくて、エッチで情熱的な、こい人同士のするやつ。

どこがエッチで、どこが情熱的なんだよ。口の中で、バカでかい（しかも生温かい）ナメクジがはいまわってるみたいだ。イヤだ。気色悪い。そうか、だから……「何だってするんだね」なんてたずねたんだ。あたしったら、「何をされてもガマンします」って、約束しちゃった。

息が苦しくなって、口はふさがれてるから鼻で息をしたら、自分の息が親分の顔に当たってはね返ってきた。

息を5回したところで、やっと顔をはなしてくれた。その間に――舌をからませたり、歯やほっぺの内側をなめたり、好き勝手にされちゃった。口の中のツバをはき出したいけど、それをしちゃ失礼だなと、それくらいは弁えてる。

というか、そんなことをしてるヒマはなかった。

親分は、ますます強くあたしのかたをだいて、空いてる右手で服の上からオッパイをなで始めた。他人にさわられるのは初めてだ。

ジャンパースカートのむな元に手を差し入れられて……すごく、くすぐったい。

「ひゃっ……?!」

指がチクビをこすったしゅんかん、電気みたいなショックがむね全体に走った。

「あ……いたい」

なでるだけじゃなくて、ポチを指でつままれて、電圧が100ボルトから1万ボルトにはね上がった。

「いたい？ 気持ち良いのまちがいじゃないかな？ こんなに立っているよ？」

クリクリクリクリ……つままれてこすられて。1万ボルトが暴れまわる。

親分の言葉は、半分くらい当たってるというか……いたいのか気持ち良いのか、分からなくなってきた。のも、頭がぼうとしてきたせいだ。

「そう言えば、このブラジャーを着けると時から、チクビを立たせていたな。ユウちゃんはHな女の子だね」

そうか、あたしはHなんだ。何故か、親分の言葉がストンと心の中に落ちてきた。

「あ……？」

オッパイから親分の手がはなれて、つい声が出てしまった。もっといじってよ。

親分の手が、あたしのおなかを下へすべって行って……太ももで止まった。

スカートの上からなでられて、100ボルトくらいの電気と、キスのときの半分くらい

のナメクジとを、同時に感じた。チクビとはちがって、いたくはない。

親分の手が、だんだん下がって、スカートのすそから入ってきて。

「あ……」

はだを直にさわられて、また声が出ちゃった。

親分の手が、今度は上がってくる。太ももの内側へすべりこむ。

「もっと力をぬきなさい」

無意識だったけど、ぎゅっと足をしめて、親分の手がそれ以上はおくまでとどかないようにしてた。でも、耳元にささやかれて、それに気がついて、力をゆるめた。もっとおくまでさわられたかったからじゃない。何だってしなくちゃ家を取られてしまうからだ。

スススッと手がすべって。

「やだ……！」

パンティの中心をつつかれて、オマタに10万ボルトくらいのショックがあった。本当に、ビリビリッて感じた。

すごくHなところをさわられてる。それは分かっているけど、足をとじられない。にげられない。これをガマンすれば、家を取られなくてすむ……半分は、口実。10万ボルトは、実は気持ち良い。ちがうかな。くすぐったいのと、しびれるのと、ふるえるのとは、ゴツチャになったような感じ。そして、チクビのとき以上に頭がぼうっとしてくる。何も考えられなくなってくる。

「それじゃ、ヌギヌギしていこうね」

赤ちゃん言葉で話しかけられて。わきのホックを外されて、ジャンパースカートをぬがされた。それから、ブラウス。ママ以外の他人の手で服をぬがされるなんて、ようち園のとき以来だ。

「あっ……」

そうだ、これはさつえいだった。それを思い出した。でも、だから、どうだっていうんだ。ハダカだろうと、おっぱいだろうと、何だってやると覚悟を決めてたじゃないか。

気がついたら、ブラジャーもパンティも全部ぬがされて、ニーハイだけにされてたんだけど。

「え……また着るの？」

何故か、ジャンパースカートをすはだに着せようとされてる。

「うん。これは、シンボルってやつだからね」

ハダカに学ランとか、ハダカに制服のスカーフだけ。そういったところに、初々しい味があるんだってさ。オトナの考えることは、分からないや。

「ずいぶんと気持ち良さそうにしてたな。今度は、オレを気持ち良くしてくれ」

親分が服をぬぎ始めた。トレードマークかって感じのタテジマスーツをぬいで。ネクタイはしてなくて。むらさき色のワイシャツをぬいで。

ええっ……かたから背中、それと二のうでにも、くすんだ青とあざやかな赤の『絵』。イレズミだ。クリカラモンモンてやつだ。

あたしの目線に気づいて、親分がすご味のある笑いをうかべた。

「びびったか？」

とっさに、小さいころのことを思い出した。おふろの修理だっけ。2週間ほど銭湯に通っていた。ある日、知らない小父さんが全身にお絵書きしてあるのを見て、「あのえ、なんのえ？」ってパパに聞いたら、「シッ」てしかられて、パパは小父さんに「見事なホリモノですね」とかなんとか、お愛想を言ってたっけ。

「おどろいただけです。ホリモノはヤクザ屋さんの金カンバンなんでしょ」

「ほおお。言ってくれるな。そうとも——男イッピキ、止めてくれるなおっ母さんてやつだ」

良く分からない。

「気に入ったか。なんだったら、ユウちゃんもほってみるか」

「イヤです！」

当たり前じゃない。プール授業どころか体育の着変えもできなくなる。およめにも行け

ないよ。

「ははは。正直でよろしい」

からかわれたんだ。

親分は上気元でズボンをぬいだ。

ええっ……太ももにまでイレズミがあるけど、あたしがおどろいたのは、下着の方。ブリーフでもトランクスでもなくて、フンドシだ。銭湯なんかで、たまにおじいちゃんが着けてる、前かけみたいのじゃなくて、真ん中がブリーフみたいに引きしまってて、両サイドは太いヒモ。じゃなかった。ほどくと、真ん中の部分もふくめて全体が30センチはばの布になった。なんて観察してる場合じゃない。

親分は、あたしをベッドから下ろして、開いた足の間にすわらせた。

目の前に、オトナのチンチンがデロンとぶら下がっている。マジマジと見つめてしまった。でかい。おさかなソーセージくらい。でも、ソーセージにしては、くさっているみたいな色だ。先っぽはソーセージじゃなくて、カサが開いていないマツタケみたい。ここは赤味がかってる。カサのふちが、デコボコしてる。

「これを、ユウちゃんのお口でしゃぶってくれるかな」

な、なにぬねの……じゃない。なにをおっしやるウナギさん……でもない。

「あ、あの……しなくちゃ、ダメですか？」

「したくないなら、しなくてもかまわんぜ。うちのわかいもんに、引っこしの荷造りを手伝わせてやろう」

ぐぬぬぬ……ええい、毒をくらわばチンチンまでだ！

あたしは、目の前にぶら下がっているチンチンを、ひと思いにパクンとくわえた。

「うぶ……？」

なんだよ、これ。口の中で大きくなってく。

そうか、さっきのがふだんのサイズで、今は立ってきてるんだ。

「かむんじゃないぞ。歯を立てたら、おまえのメスチンポを同じ目に合わせてやるからな」

ふえ……メスチンポ？ そんなの、聞いたこともない。ていうか、あたしにチンチンなんか付いてないってのは、本人が一番良く知ってる。でも、かまないように気をつけよう。

ちょっと落ち着いてきて。口の中のチンチンを味わう（？）余有が生まれた。ちょっとだけしょっぱい気がするけど、それほどじゃない。舌ざわりというか歯ごたえは、おさかなソーセージを丸かじりじゃなくて丸なめしてる感じ。それよりも、鼻をくすぐるジンジロ毛が、くすぐったい。動物っぽいようなお日様で温められた草のような海岸に打ち上げられた海草のような、ひと言で表わすと男くさいにおいが……なんでかな。ますます頭をぼうっとさせる。

オシッコの出るところを口に入れてると思うと、ゲエしそうになる。これはガマンしなきゃ、引っこしなんだろうな。

「くわえているだけではラチが明かんぞ。しゃぶれと言ったはずだ」

しゃぶるって……チトセあめの親玉をペロペロするみたいで良いのかな。

ペロペロアムアムペロペロ……

「もっと先の方をしゃぶれ……そうそう、そこをキトウという。キトウのうら側に立てスジがあるな。そこを横向きになめろ。カサのまわりは立て方向にぐるりとだ」

注文の多い料理店だな。あたしの方が食べてるのか。

口をすぼめて息をすいこんでくちびるをふるわせろだの、のどのおくまでくわえこめだの、いろんなことをさせられた。

親分にうんと近づいているから、ベッドにひざ頭がつき当たらないよう、足は直角以上に開いている。その中心をつつかれた。

「みゃうん……」

また、電気が走った。今度はうすいパンティさえもなく、マンマンを直ゲキされた。10万ボルトじゃなくて、50万ボルトだ。だけど、これ……足の指でつつかれてる。すごい、クツジョクを感じる。土足（ソックスだけど）でふみにじられてる。これも「何をされても」のうちだと思って、文句は言わない。

ううう……マンマンの中にまで指が入ってきた。上下にクチュクチュこねくられてる。クツジョクがはね上がるけど、50万ボルトが100万ボルトをこえる。

なんだか……オマタがしびれるというのとはちがうけど、ジンジンしてくる。おくが熱くなってくる。ジュンッて、オシッコをちびったような感覚があった。

「こら。下の口にかまけて、上の口がお留守になっているぞ」

「み`び`い`っ……」

ぐんっとワレメを足の指で持ち上げられるみたいにされて、100万ボルトがさらにスパークした。

「しょうがねえな。それじゃ、オレが動かしてやるよ」

がしっと、頭を両手で持たれた。

「ちっと苦しいだろうが、500万円の一部だと思いな」

頭を前後にゆすぶられた。チンチンが勝手に口の中を出入りする。何度も何度もどのおくをつかれて、ゲエしそうになる。頭をゆすぶられて、目が回ってるのか頭つうがしてるのか。

「む`ふ`う`う`、も`ぼ`お`お`……」

両手は自由だけど、相手をつきのけようとはしなかった。オトナの力には敵わないだろうけど、それ以前に——ママの家を守るんだって、その想いがあたしのテイコウを止めていた。

せいぜい数分で、親分は許してくれた。

「ちと、かわいそうだったな。苦あれば楽ありだ。今度は天国へ連れてってやる」

親分はあたしをだき上げて、ベッドの真ん中へ放り投げた。

マットよりもずっとやわらかくて、全然いたくなかった。

親分もベッドへ上がって来て。あたしの右横でアグラすわり。

「さっきは、ずいぶんと良がっていたな」

投げ出されてめくれているスカートの中へ、いきなり手を入れてきた。ワレメを指で、

スウツとなで上げた。

「ひゃうんっつ……」

また、10万ボルト……くらいかな。でも、ビリビリじゃなくて、マンマンのおくまで電気が走る。交流じゃなくて直流？

「あ……？」

マンマンの中まで指がおし入ってきて。オシッコの出る所よりもっと下のあたりに、さらに指が入ってきた。こんな所にもアナが開いてた……ピキキッと、そこが引きつれるようないたみが、ちょこっとだけ走った。

「いたいッ……」

いたいってよりもびっくりして、まあ悲鳴ってほど大げさじゃないけど。

「これなら、どうかな？」

いたかったあたりを、ちょんちょんとつつかれた。

「平気です。でも、くすぐったい」

「ふん……？」

親分は左手をオッパイ（ていうほどのふくらみじゃないけど）へのばして、チクビを親指と人差指でつまんだ。また、10万ボルト。これは交流かな。チクビがビリビリふるえる感じ。

親分が残っている3本の指で、ささやかなふくらみをくすぐる。くすぐりながら右へ左へと、チクビを中心に半円を絵書く。交流がチクビからふくらみ全体へ流れて、親分の手の動きに合わせてゆれてるような感じ。

そうされながらマンマンのおくをこねられると……

「あんんっ……」

さっきはいたかったところが、すごく気持ち良くなってきた。なんだか、コシ全体が、ゾワゾワムズムズする。

ずっと、指が引きぬかれた。電気もゾワゾワムズムズも消えていく。

「ああんん……」

「物ほしげにコシをくねらせてやがる。男勝りのはねっ返りと思っていたが、なかなかどうして」

「もうちょっと追いこんでみたら？ まだ、クリをかまってやっていないでしょ。もしかすると、イクんじゃないの」

お姉さんが、何か言ってる。クリとかイクとか、良く分からない。

「個人的には、毛も生えてないガキをエクス達させるのも面白いけどな。かえってウソくさくて、売物にやらねえんだよ」

あたしの事を言ってるのはわかるけど、後はチンプンカンプンだよ。

「そういうわけだな」

親分が、あたしの足を大きく開かせて、その間でひざ立ちになった。

「楽あれば苦ありだ。ちっとばかり、いたい目に合ってもらうぜ」

親分は、あたしのひざを直角に曲げさせた。ひざの上をつかんで持ち上げた。おしりがベッドからういた。

え……なに？

親分がへっぴりごしになって、デスター総統バンザイみたいになってるチンチンをワレメにおしつけてきて……うあああ、中へ入れようとしてる。

ワレメよりチンチンの方がでかいんだから、無理。不可能……じゃない。ワレメを無理矢理にこじ開けて……キトウがおし入ってきた。

キトウが、あたしの中のおくにつき当たったのが分かった。なのに、まだおしつけてくる。さっき指を入れられたところに先っぽが……

「いたいっつっ……！」

ビキキッと、引きさかれるようなゲキツウが走った。反しゃ的にずり上がってにげようとしたんだろう。つかんだシートが、ズルッとすべった。

「ガマンしなくていいぞ。まだまだ、いたくなる」

くそお。そんなことを言われたら、ガマンしてやるって反発してしまう。

けど、ガマンできる位じゃなかった。

親分は、ますます上体をおおいかぶせてきて、チンチンをさらにおしこんでくる。

ズググと、あたしのマンマンのおくの小さなアナが、おさかなソーセージどころかボ
ンレスハムみたいなチンチンで引きさかれていく。じわじわとおくへ入ってくる。

「いたい、いたい、いたい……やめてよ、許してよお！」

あたしは不覚にもナミダまで流して、わめいていた。

親分は、もう、家とか借金のことは口にしなかった。おこっているのか笑っているのか
分らない複雑な表情で、さらにじわじわとチンチンをおしこんでくる。マンマンのする
どいゲキツウだけでなく、内ぞうがのどへ向かっておし上げられるみたいな、にぶい気
色悪さも加わった。

そうして、あたしのおなかと親分のおなかとが、くっついた。

「ふうう。ガタイはチビでもマンコは一人前だな。ちゃんと根元まで飲みこみやがる」

良かった……ちっとも良くないけど。おなかがぶつかったんだから、この先へは進めな
いよね。ちょっぴり安心したけど。まるきり、そうじゃなかった。

「それじゃ、これからが本番だぜ」

チンチンがズニュッとぬけていく感覚があった。と思ったら、ズグウッと今度は一気に
つき入れられた。

「きひいつ……！」

またゲキツウ。

ズニュ、ズグッ、ズニュ、ズグッ……チンチンが出入りを始めた。そのたびに、ゲキツ
ウが走る。

「いたい、いたい……やめてください」

いたいけれど、ちゃんとけい語を使えるくらいには分別がもどってきた。

親分には、もどってない。じゃなけりゃ、こんなガキを泣かしたりはしない。ますます

ぬき差しのピッチを速めて。

パンパンパン……かわいた音が、どこから鳴ってるんだろ？

あたしはあきらめた。うったえたって聞いてもらえない。いつまで続くか分からないけど、終わるまでガマンするしかないんだ。

あたして、ずいぶんとあまやかされてたんだと、不意に思った。これまでは、パパはもちろん、上級生だろうと先生だろうと、ズケズケ物を言ってきた。

えい画館で、まわりの人がタバコをすってるときなんか「禁えます。やめてください」なんて注意してたっけ。パパはキョウシュクしてたけど、相手の人はちゃんと注意を聞いてくれてた。

でも、ああいうのって。あたしがチビでガキだから。ガキを相手にケンカをしたらオトナの面子にかかわるからだったんだ。

オトナが本気を出したら……こんなふうに、されてしまうんだ。

くやしい……というのとも、ちがう。

あたしがオトナだったとしても、やっぱり同じだったんじゃないかな。だって、女どもの。男の人には勝てっこない。

それを分からせられた。

同級生の男子とケンカして相手を泣かせてたのだって……相手が本気になってなかったんだと気づいた。だって、男子同士のケンカって、あたしのときとはハク力がちがう。あたしには（あたしもだけど）グウパンチを使わない。

「ふう……」

親分が動きを止めた。

ズヌウウッと、チンチンがぬき去られた。

良かった。終わった……んじゃないかった。

「ガキの初物とはいえ、シロクロの本番だからな。四十八手とは言わねえが、何手かはひろうせんことにや、売物にならねえぜ」

あたしは四つんばいにさせられた。

親分は、あたしの後ろでひざ立ちになって。両手でコシをつかんで……後ろから、チンチンを入れてきた。

あれ？ さっきよりは、いたくない。アナが広がったのか、それとも慣れてきたのかな。といっても、さっきのがオトナのグウパンチだったら、こんどは同級生男子のビンタくらいの方がいい。他の女子なら、どっちにしたって泣くよ。

パンパンパンパン。今度は音の出所が分かった。出し入れされるたびに、あたしのおしりに親分のおなかが打ち当たって、かわいた音が鳴るんだ。音につれて、いたみがゆれる。

だけど、さっきみたいに何も考えられないゲキツウじゃない。だから、さらにあれこれ考える。

今のこの形。犬がやってるやつだ。メス犬にオス犬が後ろから乗っかって。なんだろうって観察していると、オトナたちが犬に水をぶっかける。

あれって、こういうことだったんだ。そして、レディースコミックで、男女が重なって下半身のあたりが白かったり花でかくされていたり——あれは、さっきの形に似てる。

ということは。今、あたしは、親分に、セックスを……されてる？　させられてる？　そういうことだったんだ。

言葉は知ってても具体的なイメージが共にななかった、ロストバージン。それが、これなんだ！！！！

さすがに、これでおよめにいけなくなったとまでは思わない。でも、クラスメートのだれよりも早いのは確実だ。オトコ女だガサツだと、これまで言われてきたけど、これですはあたしのことを見直して……言えるわきやないだろ、こんなこと！

5分かな、10分かな。さんざんゆすぶられてるうちに、ほとんどいたみがなくなってきた。最初は、出し入れされるたびに、マンマンの中がきしむみたいな感じだったのが、だんだんなめらかになってきた。

けっこう早くなじむもんだなと、あごを引いて、出し入れされてるところを、こわいも

の見たさってやつで……うあ?!　ワレメが血まみれ。ジュボジュボ音を立てて出入りしているチンチンも真っ赤。

やっぱり、無理だったんだ。小さなマンマンが太いチンチンで引きさかれ……待てよ。

生理が始まると血が出るってのは、女子だけの保健授業で習ってる。あ、そうだ。ロストバージンのときも血が出るって、レディースコミックで読んだぞ。思い出した。それだ。

ほっと安心して。それから悲しくなった。

だって。初朝があって、それから、今よりもずっとボンキュッボンに成長して。それからだろ、ロストバージンは。順序が逆だ。

なんか……悲しいよりも、くやしくなってきた。

それもこれも、あのダメバカフヌケのせいだ。

不思議と、親分へのうらみは感じない。あたしにこんな非道いことをしてるのに。ママの家を取り上げないでいてくれるせいかな。

でも、そのためには……こんな、いたくて、はずかしいことを、まだ何回もしなくちゃならないんだろうな。

不意に、チンチンが引きぬかれた。

バチイン!

おしりをひっぱたかれた。

「きゃあっ……?!」

おどろいて悲鳴を上げたけれど、いたくはなかった——といえばウソになるけど。ロストバージンの大ゲキツウに比べたら、らん暴になでられたくらいでしかない。

「何をぼけっとしてる。気合を入れて……」

あたしをしかりかけて、親分は言葉につまった。

「まあ……気合を入れて犯されろってえのも変な話だし。良がられても絵にならねえし。泣きさけんでくれねえのは、オレの努力不足か」

何かわけの分らないことをゴニョゴニョ。

さっきとは反対側のおしりをはでにひっぱたいて、それでウヤムヤ。

お姉さんが差し出したウェットティッシュで、親分は血まみれのチンチンをぬぐった。
「ユウちゃんも、きれいにしなさい」

受け取って、四つんばいのままでワレメにウェットティッシュを当ててみたけど、いたくはなかった。きずついたのは、おくの方にあるアナの中だ。そこまでウェットティッシュを入れるのはこわいので、ワレメの外だけをぬぐった。くちびるみたいな形に血が着いた。

「それじゃ、次いくぞ。今度は、おまえが上になるんだ」

親分が、ベッドの真ん中でゴロンとあお向けになった。チンチンも大きいままで、おなかの上にあお向け。

「……？」

「どこにどう入れるかは、もう分かっただろ。おまえがオレをまたいで、コシを下ろすんだよ」

何をすれば良いか分かったし、できると思う。けど……はずかし過ぎるよ。これまではイッパイイッパイで気がつかなかったけど。2台のカメラがベッドの両側から、あたしに向けられてる。1台なんか、もろにオマタをねらってる。

でも、乗りかかった船。ていうより、もう太平洋のど真ん中だ。アメリカでも北極大陸でも行ってやる。

あたしは意を決して上体を起こし、ひざ立ちで親分をまたいだ。チンチンよりも親分の顔へ目が行って……ますますはずかしい。

ので、後ろ向きになった。どうせ、入れるときはチンチンを直角に立てるんだから、どっち向きでも良いよね。

「おいおい。いきなりバックかよ」

親分がクククッとふくみ笑い。正面を向くよりもむずかしいのかな。

とにかく……チンチンの根元をにぎって、まっすぐに立てて、コシを落としていって、

キトウをワレメへ入れて。おくにつき当たった。どこらへんに入れられたかは覚えている。
チンチンを思い通りに動かすのは意外とむずかしい。コシの方を動かして調整。

クブツとはまりこむ手応えと感覚。

ううう……やっぱり、入れるのはこわい。軽くなってきてるけど、いたいものはいたい。
と、思ったけど。もうアナはさけて広がってるし、血ノリですべるし。うめき声すら出なかった。それに、いたくない方へコシを動かせるので——親分のおなかにすわれる所まで深く入れても平気だった。ちょっとだけ、やせガマン。

「はふうう」

安心のため息。達成感みたいな？

「こら。へたりこむのは早い」

ペチン。

また、おしりをひっぱたかれた。今度は、ごく軽かった。

「動くって……どうすれば良いんですか？」

「チンポをマンコに出し入れするんだよ。できるなら、チンポをアナへすりつけるようにしてみろ」

コシをちょこっとうかしてみた。チンチンがズニユとぬける。またコシを落とすと、グンッと入ってくる。コシの上下に共なって前後にも少し動くから、しぜんとチンチンがアナにこすりつけられる。案ずるよりも産むが易しってやつだ。

んしょんしょんしょ。ズニユ、グン、ズニユ、グン、ズニユ、グン。

うええ。カメラがオマタに近づいた。チンチンが出入りしてるところを接写されてる。
今さら気にしてもしょうがない。

「ちょっとストップ」

ペチンとおしりをたたかれた。

「顔が見えねえと、さびしいぜ。向きを変えな」

顔を合わせるのは、はずかしい——なんて、どうでも良いや。100点満点で200点

と180点くらいしか、はずかしさはちがわない。

よっこらせと、しゃがんだまま向きを変えた。アナの中でチンチンがグニユルウンと回った。ちょっとくすぐったい。

「ぶわははは」

親分が号快に笑った。

「おいおいおい」

「うへえ」

皮ジャンふたりは、あきれたような声？

「この子、すごいわね。教えてもいないのに花時計だなんて」

あたし、何かとんでもなくHなことをしてみたい？

これは、後で親分から教わったんだけど。女性が上にすわった形で、チンチンをはめたまま回転するのを、『ゴシヨ車』とか『花時計』とか『ヘリコプター』というんだそうだ。時計とヘリコプターは分かるけど、ゴシヨ車ってなんだっけ。ま、いいや。

「そのまま、何回転かしろ。ハメたままだぞ。いい絵になる」

面どうだな。バランスをくずしたり、チンチンがぬけてしまわないように注意しながら――身体を左へひねって、右足を上げて親分の顔の上をこえて。左足を上げて親分の足をまたいで。身体をひねるにつれて、ベッドに着いてる手の位置も変えていく。

二回転目に、かかとで親分の顔をわざと軽くけるといふか、こすってやった。しかられなかった。でも、それがオトナの度量だと、今は分かる。二度はくり返さなかったよ。

アナのなかでチンチンが回転するのは、いたくなくて、くすぐったくて、わりと気持ち良い。ので、弱音をはかずに続けられた。

三回転したところで、今度は逆回転。これも三回。

「良し。それじゃ、続きだ」

動きを止めて。親分と向かい合って。ひざのクッションを再開。ひざがだるくなってきたので、上体をかたむけて両手で支えた。

あ、これ……アナとチンチンの角度が合わなくなって、強く中をこすられる。いたいのよりも、くすぐったい方が強くなった。それが、なんか気持ち良く感じる。

5分ほど続けると、またストップをかけられた。

「それはやめろ。オレがイキそうになる」

強くこすると「イク」のか。「イク」ってなんだろう？

ひざ立ちじゃなく、スクワットで上下しろと言われた。

はあい。んしょ、んしょ、んしょ……アナとチンチンの角度が合って、スムーズに出入りする。でも、前よりもひざがつかれる。

これも、5分くらい続けさせられた。ビデオのワンシーンずつなのかな。

親分は、またあたしをあお向けにさせた。あたしの足首をつかんで、頭の方へ折り曲げた。あたしは女子の中では、そんなに身体がやわらかい方じゃないけど、いちおうはゆかに(手の平は無理でも)指先は着く。だから、あお向けの身体をふたつに折られて、足の指先が布団に着くくらいは平気。背中が曲がってコシがういたので、ますます平気だ。でも、これって。おっぴろげられて、ワレメをもろにのぞきこまれる形だ。これまでで、一番はずかしい。

て、いうか。自分からも丸見え。ふだんは見下ろしても、つるんとしたY字形の中心に一本線だけなのに、今は左右にわれて——ふうん、内側はピンク色なんだ。ピンク色と血の赤色とが入りみだれて、芸術ばい。

その芸術の中へチンチンがおし入って来る。もう、いたみはほとんど感じない。アナのふちとアナの中をこすられて、くすぐったくて、ちょっぴり気持ち良いかな。

「よっしゃ。ラストスパートだ」

親分が、最初のときの倍速くらいのピッチで、出し入れを始めた。

パンパンパンパンパン……音が大きい。全身が、はげしくゆすぶられる。

今度は、5分よりかなり短かったんじゃないかな。

「うっ……」

親分が小さくうめいて、ぶるぶるっとコシをふるわせた。そして、あたしの上におおいかぶさって、体重をのしかけてきた。

身体がマットにめりこむ。重たいよ。でも、これくらいは、これまでのたくさんのゲキツウに比べたらヘノカップ。じっとガマンする。

「いい加減でどいてやりなさいよ。チソクしちゃうわよ」

お姉さんが言うてくれて、親分はあたしからはなれた。

「あ……？」

スポンッて感じでチンチンがぬけて。なんか、ちょっと、さみしく感じた。

ベッドから下りる親分のチンチンは、最初に見たときと同じくらいまで小さくなっていた（でも、でかい）。

「これで、さつえいは終わりだ。シャワーを浴びて来い」

はふうう。終わったんだ。借金の5分の1（だけ……）は返せたんだ。

ベッドから下りようとして。身体のあちこちが、だるくなってる。ジュウナン体そうばかり30分も続けた感じ。そしてオマタは、やっぱりズキズキいたい。

それと。身体を起こすと、何だか白いドロツとしたのがワレメからたれてきた。白い血……まさか、白血病？

あたしが不思議そうにしてると、親分が笑った。良く笑う人だ。

「そいつは精液だ。知らなかった……としても、おかしくねえか。日本の性教育はおくれているからな」

古くは子種といったそうさ。マンマンのおくの子宮ってところに子種をまくと、赤ちゃんが生えて(?)くるんだってさ。

ああそうかと、なっ得した。パパとママがいっしょにねると赤ちゃんができるわけが、完全に分かった。セックスして、子種をまくんだ。

え、でも……?!

あたしがうろたえたのを親分は見ぬいて、先回りして教えてくれた。

「心配するな。赤んぼうができるのは、生理が始まってからだ」

安心した。ので、バスルームへ行った。シャワーはオマタを中心に、しつこいくらいお湯をかけた。

そして、大発見。水圧を最大にしてマンマンにシャワーを直接当てると、コシがガクガクして、立ってられないほどに気持ち良い。そう快とか温いとか安らぐとかじゃなくて。セックスされてるときにちょっぴり感じた、くすぐったさの中の気持ち良さと同じで、もっとずっと気持ち良い。これもHに関係あると直感した。

でも、すぐにやめた。だって、ここのバスルームのドア、総ガラス張りだもの。もうハダカやシャワーシーンを見られるくらいは平気になった（ことにしとく）けど、ひとりでHばいことをしてるのを見られるのは、何故かはずかしい。一番Hなことをしてるシーンは、さんざっぱらさつえいされてるのに、おかしいかな？

服を着変えてホテルの外へ出たときには、すっかり夜になっていた。親分の黒ぬりベンツじゃなくて、お姉さんが白の軽自動車で家まで送ってくれた。と中でファミリーレストランという食堂へ寄って、夕ご飯をおごってもらった。ファミリーレストランで、何でもあるんだね。お子様ランチはもちろん、中かセットとかハンバーグとかうどんとか。デパートの食堂より、ずっと十実してる。あたしがメニューに目移りしてる間に、お姉さんがさっさとお子様ランチを注文しちゃったのが、ゆいいつの不満。

こういう間ガラだから、おしゃべりがはずむはずもなかった。あたしがユウちゃんのフルネームを知ってるんだからって、お姉さんが名前を覚えてくれたくらいかな。^{かわいさとみ}河合郷美というんだって。

親分のオメカケさんかなというヤマカンとは、当たってた。でも、本妻の次に2号さんという人がいて、郷美さんは3号なんだって。

家に帰ったら、パパがさすがに心配そうに待っててくれた。でも、お酒を飲んでよっばらってたから、あたしは子ども部屋へ直行して……ベッドにね転がって、今日の強天動地の体験をあれこれ考えているうちに、外出着のままでねむってしまった。

よく朝は、パパは二日よいをかかえながら、あたしを遊園地へ連れてってくれようとした。100万円も借金を返したごほうびだと思う。

でも、あたしはそんな気分じゃなくて、断わった。

パパはしょげていたけど、10時過ぎにはひとりで出て行った。まさか、競馬とかじゃないよね。500万円（今は400万円）も借金があってスカンピンのはずだもの。

あたしはひとりで昼ご飯を作って食べて、夕ご飯はパパの分もちゃんと作っというてあげた。パパは、夕ご飯の時間には帰って来たけど、またよっぱらってた。

そして、月曜からはいつも通りの生活がもどってきた。

……はずだったんだけど。

アナルバージン

土曜日の集団下校。解散地の公園に、親分の3号さんが待っていた。

これから2本目のうらビデオをさつえいをすると言われて、そのまま軽自動車で——先週と同じ、Hなことをするホテルへ連れてかれた。

まだ昼ご飯を食べてないって言ったんだけど。はげしい運動をする前なんだからガマンしなさいって。

ちなみに、Hなことをするホテルはラブホテルっていうんだそうだ。そうだよね。セックスは、アベックが熱々のラブラブになってからするものだ。そう考えると、泣きたくなくなる。でも、泣かない。2本目のさつえいで借金がまた減るんだから。

ホテルの部屋は、前と同じじゃなかった。前はイッパイイッパイだったから、部屋の様子なんかろくに覚えてない。でも、ベッドがひとまわり小さいから分かった。その代わり、大きなビニールボールと木馬が置いてあった。

部屋で待っていたのは、親分と皮ジャン2人。の他に、小父さんになりかけてるお兄さん。

「こいつは不動^{ふどういさお}勲雄。サオ師——と言っても分からねえか。今日のおまえの相手役だ」

そう聞かされて、がっかりしたのは何故だろう。

「今日はな、順序がテレコだが、イメージビデオってやつもワンパッケージでいくからな」

何のことか分からないけど、聞かない。何だってガマンしなきゃ、ママの家を取られてしまう。それじゃ、先週のガマンがムダになってしまう。

これなら自分で着れるでしょ——と、郷美さんがわたしてくれたのは、水着だった。といっても、外国のビーチでボンキュッボンのお姉さんが着ていそうな、きわどいビキニ水着。オッパイとマンマンをかくす白い小さな三角形のうすい布と細いヒモだけ。

前は3人だったのに、今度は4人の男の人の目の前で、ハダカになって着変えた。でも、とっくに覚ごを決めてるから、カマトトぶったりかくそうとはせずに、堂々と着変えた。後ろ向きにはなったけど。

ブラジャーは三角形の部分が小さいので、どれだけヒモをきつくしめても、内側に肉が寄らない。布がダブついたままで、あきらめた。

それよりも、パンティが問題。ワレメがすけて見えるのは仕方ないけど、逆三角形がおしりにまでとどかない。ヒモが後門に食いこんで気色悪いよ。

「それじゃ。まずは、ここにあるオモチャで遊んでみな」

と言われても。

「こんなので遊ぶ年令じゃないです」

「アホウ。演技ってやつだよ。楽しそうに遊ぶ演技だ。おまえは女優なんだぞ。女優なら、それくらいできるだろ」

あ、そうか。うらビデオの女優としてデビューしたんだ。Hなことをされて、はずかしいのをいっぱいさつえいされて……イヤではずかしいことなのに、女優って言われると出世したような気分になっちゃう。よし、がんばる。

とりあえず、木馬に乗ってみた。けっこう大きい。遊園地にあるメリーゴーラウンドのやつくらい。またがって、前後にゆらしてみる。楽しくなんかないけど、演技でニコニコしてみた。

「身体をゆらすんじゃなく、マンコを木馬にこすりつけて前後に動かせ」

なんだよ、それ。ま、やってみる……んんっ？！

ビリビリッと、マンマンに電気が走った。前のさつえいでマンマンを指でいじられたときの10万ボルトなら、これは1万ボルトくらいかな。コシがくだけたりせずに、ずっと続けられる。

自転車のサドルの上でコシを前後にずらしても、こんなふうには感じない。あ、自転車に乗るときは、スカートをおしりの下にしいたりはしてない。短いから。ママがなくなっ
てからは、洋服の新調もおくれ気味なんだ。だって、あたしが買い物に連れてってもらえる日曜日には、たいてい競馬が開かいされてるから。こんなことを考えてちゃ、演技に集中できないね。

スコスコ、ゆらゆら。ズコズコズコ、ゆらゆらゆら。1万ボルトだけど、本物の電気とちがって、ダムの水みたいにどんどん留まっていく。注電式電池？

ギコギコギコギコ……音がするほど大きくゆれる。1万ボルトが留まって10万ボルトくらいになった。

サドルに比べて、マンマンへのしげきが強い——のは、木馬の背ぼねがもり上がってるせいだ。本体と色がちがう。後からくっつけたばい。てことは、こういうことに使うように改造されてる？

それに気づいたら、なんかシラケてしまった。ので、木馬はやめた。2方向からカメラにねらわれているのも気がかりだった……なんて、おかしいかな。ゼンラもセックスも、さんざっぱらさつえいされてるのにね。

カメラを気にしながら、ビニールボールで遊ぶ。どうやって遊ぼうかな。さわってみると、うすいビニールを空気でふくらませてるんじゃないかった。わりと分厚いビニールで

きていて、おしてみるとビーチボールなんかよりも圧力が小さい。

それじゃ、こういうこともできるかな、と。ビニールボールの上におおいかぶさってみた。グニョンとボールがたわんで、あたし全体を包みこむ。けど、ゴロンと転がって、あたしはすべり落ちた。

くそ。やられてたまるか。変なところで、ふだんの負けん気がもどってきて——意地でもボールの上に乗ってやる。

バランスを取りやすいように、イスの要領でこしかけて。左右にかたむかないように気をつけながら、足をゆかからうかした。

おととととと。竹馬の一本立ちよりもむずかしい。3秒くらいでゴロン。何度いどんでも、せいぜい5秒。転がるたびに、大また開きになって。そこをカメラがゲキ写してくる。

木馬と合わせて30分くらい遊んだところで、おしまい。30分は、当てずっぽじゃない。かべに時計がかけてある。

ここで、あたしの相手役だというお兄さんが、カメラアングルに入ってきた。

「そこで四つんばいになってね」

やさしい声色だ。やさ男ってやつだ。親分はガサツだけど、男っぽい。

お兄さんは、四つんばいになったあたしの後ろへまわりこんで。

「ひゃっ……？」

後門に細いぼうをおしつけられて、あたしは前へにげた。

「動いちゃダメだよ。カンチョウをしてあげるんだから」

してほしくない。けど、これも500万円のうちなんだろうな。

つぶと、細いぼうを後門につき立てられた。

グジュウウツと、カンチョウ液が入ってくる。

あ……カンチョウされたら、じきにウンチだ。まさか（じゃなくて、きっと）そのシーンもさつえいされるんだろうな。

「30分はガマンするんだよ」

無理。ガマンした方が効果はあると知ってるけど。15分以上は無理……というのは、まだ小さかったときで。夜中に原因不明の高熱が出て、民間両方ってやつだっけ。あのときは、ママが指でずっとおさえてくれたけど、それでも10くらいで大泣きしたもの。

今はずいぶん成長して、ガマン強くもなってるけど。30分は絶対に無理だと思う。

あたしが、そううったえると。

「みんなでゲームをしてれば、すぐに時間が経つわよ」

お姉さんの提案は一理あるけど。

色とりどりの丸を絵書いたビニールシートが、ゆかに広げられた。ツイスタゲームだ。

これって、変なふうに身体をひねる。無理の上に無茶が重なる。あ……分かってて、わざとの意地悪かな。

「こりゃ面白いな。よし、おまえが勝ったら、新しい借金の20万円はチャラにしてやろう」

「ええっ……どういうことですか?！」

早くも出そうになっていたウンチが引っこんじやった。

「先週の日曜だな。大勝負に、どうしても貸してくれって泣きついてきたな」

あの、クソ親父。やっぱり競馬だったんだ。ケーキも買って来なかったから、大負けのヤケ酒だったんだ。

「もう、絶対に貸したりしないでください」

「おいおい。こっちは、商売なんだぜ。八百屋に大根を売るなって言われてもな」

20万円もする大根が、あるもんか。

「こっちとしては、おまえがたくさんビデオに出してくれるんだから、ありがたいんだぜ」

ぐぬぬぬぬ。帰ったら、クソ親父にクギを差す——くらいでギャンブルが止まるなら、

500万円も借金をこさえてない。どうするかは、後で考えるとして。

ツイスタで勝っただけで20万円だなんて、ぬれ手にアワ……じゃなくて、燃えてる手に

アワ消火器か。でも、チャレンジしなくちゃ借金が20万円も増える。500万円は、金額が大き過ぎて実感がないけれど、20万円はこわいくらいの大金だ。

「それじゃ、お姉さんと対戦だよ」

は、分かるけど。お姉さんまで水着になった。ワンピースをぬいだら、下に着てた。ピンク色のビキニ。といっても、三角形の布とヒモじゃなくて、ちゃんとブラジャーとパンティの形をしてる。バストの谷間とヒップの上半分は路出してるけど。

「20万円と聞いたら、だまってられないね」

サオ師とかいう不動のお兄さんも、服をぬいだ。競泳の選手みたいな、すごく小さな海パン。上からジンジロ毛がはみだしてる。青に白いストライプだけど、そんなデザインよりも。パンツの中でチンチンがトグロをまいてる。親分のより、倍くらい長いんじゃないかな。

2人とも水着を下に着ていただなんて、最初から仕組まれていたっぽいと思う。でも、そんなことを問い正しているヒマはない。早く勝負を着けないと……ううう、もうウンチが出そうになってる。

親分がジャッジになって、3人の立ち位置を決めた。

タタミ1ジョウ分くらいの（はばは、もっと広い）シートには、4色（緑、黄、青、赤）の丸が6個ずつならんでいる。お兄さんとお姉さんは、両はしで向かい合って、黄色と青色。あたしは、2人を左右に見る位置で、3番目と4番目の緑色。

親分が矢印のルーレットを回して。

「右足を赤」

お兄さんは横へ足を開いただけ。でも、お姉さんは足をクロスさせなければならなかった。あたしは前へふみ出して横向きになって、お兄さんに背を向けた。

「左手を黄色」

お姉さんがあたしの目の前の黄丸に左手を着いたのは分かるけど、お兄さんがあたしのすぐ後ろまで手をのばしてきたのは、意地悪だよ。

あたしの足の間にある黄丸に左手を着くと、手足が一直線上にならぶから次のバランスが取りにくい。ので、お兄さんの足の前の黄丸にしようとのけぞったら、お兄さんがひじを曲げてぼう害してくる。その内側へ身体を入れて、無事に着地。

くうう……不自然な形に身体をひねって、ますますウンチがせまってくる。おなかがキリキリいたい。

「次は、右手を青へ」

左手を着いてるとなりしか、右手の置き場所がない。これって、大開きやくでブリッジをしてるようなもの。

ビデオカメラが、ぐうっと下半身へ近づいて、マンマンを接写する。水着を着てるから平気だよ。もろにスケスケだけど、まっばだかでチンチンをつっこまれてる所をさつえいされるより、ずっと……平気だったら平気だよ。

それよりも。お兄さんの四つんばいの下へ、前後も上下も逆さになってもぐりこんでる。お兄さんはHな形にしようとかくらんだんだろう。ぐうっとコシをあたしの顔へ近づけてきた。すぐ目の前に巨大なモッコリ。タマタマがでかいんじゃないくて、チンチン本体が太くて長い。こんなふうにトグロをまいてるってことは、まだ立ってない。これが、もっと大きくなったら……そんなの、あたしの中に入りっこない。そりゃまあ、未経験のときに今くらいの知識があったら、親分のチンチンを見ても、同じように思っただろうけど。

お兄さんは、安定した四つんばい。お姉さんは、あたし以上に身体を折り曲げたブリッジ。ちええ、お兄さんがブッチギリに有利だ。

「左足を赤へ」

げげっ……大開きやくしている右足の後ろへ左足をそろえる形になっちゃう。しかも、お兄さんの両うでをかわして。

くうう……あっ！！

ビチチッと、おしりにイヤな感覚が生じた。

ビチッ、ブジュジュ……ウンコをもらしちゃった！！

「うわっ！」

「やだ、ばっちい！」

お兄さんもお姉さんも、身体を起こしてシートからにげた。

「よし。ユウの勝ちだな」

ううう……ちつとも、うれしくない。あまりに情けなくて、手足の力がゆるんで、べちゃっとブリッジがつぶれた。自分のもらしたウンコの上へ……号泣したい気分だ。

「部屋をよごしちゃまずい。そのままシートにくるんで、バスルームへ運べ」

皮ジャンの2人が、親分の指図を中実に実行した。

あたしはツイスタのシートにくるまれて……身体じゅうが、ウンコまみれだよ。

バスルームでシートを広げられて。お兄さんに、上からシャワーを浴びせられた。

冷たい。いたい。

「ほら、立てよ」

半分泣きべそで、立ち上がった。水着をぬがされても、されるがまま。頭から冷水をたっぷり浴びせられて。また、四つんばいにされた。

お兄さんがシャワーヘッドをねじって外して、ホースの先をあたしの後門におしつけた。

「今度はガマンしなくて良いよ」

ブジュルルル……

「きゃっ……?!」

前へにげようとしたら、かたをつかんで引きもどされた。

「カンチョウだけじゃ、中にクソが残ってる。ペニスがクソまみれになるのはゴメンだからね」

え……?

ブジュルルルルル……勢い良く水がおなかに流れこんできて、質問どころじゃなくなった。水がおなかの中でうずまいてる。ニン婦さんみたいに、ぽっこりふくらんできた。

気色悪いし、おなかがいたい。

「よし。出して良いよ」

ホースが後門からはなれると同時に。

ブシャアアアア……ぼとと……

さっきのおもらしでは、あわてて後門を引きしめたから、『本体』はまだ残ってた。それが、もうどうにもならない。

「はずかしいよお……」

マンマンのおっぴろげを見られるより、チンチンをつっこまれてる所をさつえいされるより100倍は、はずかしい。

あ……四つんばいのままだった。おそろおそろ後ろをふり返って見たら……タイルゆかの遠くまで、茶色にそまっていた。

「そのまま、じっとしているんだよ。きれいに流してあげる」

今度は、温かいお湯を浴びせられた。

はふうう。泣きじゃくった（今は、半べそまでだよ）後でママにだっこされてるみたいで心地良い。でも、それはせいぜい数十秒だった。またホースをおしつけられて注入されて、今度はしゃがむ余裕があったし、出た水はよごれてなかったから、そんなにはずかしくはなかったけれど。

実は、ここまでの事前所置で、うらビデオの本番は、ここからだった。

お湯のシャワーで、また全身をきれいに流してくれて。バスタオルでかみの毛までふいてくれてから。お兄さんは、あたしをおひめ様ダッコで、ベッドへ運んでくれた。投げ出したりはせず、そっとうつぶせにねかせてくれた。意地悪なんだかやさしいんだか分からない。

やっぱり意地悪だった。

「いきなりは切れずになるかもしれないから、少しずつほぐしてあげる」

後門をもまれた。というか、こねくられて。ツプツと指を入れられた。

「ひやつ……」

ちょっぴりしか、おどろかなかった。親分がマンマンをいじったときも、指を入れたものの。今度は、じゅうぶんに予測してたよ。

ああ、そうか。この流れだと、きっと、後門にチンチンを入れられるんだろうな……なんて、あたし、他人事みたいに考えてる。イヤだってこぼんだら、さつえいは中止で。借金は400万円のままだ。

「おとなしいね。最後までこうだと、ボクは楽で良いんだけどね」

「おいおい。泣きさげぶか、いつそのこと良がってくれないと、絵にならないぜ」

親分がぶっそうなことを言う。

「それはクライマックスになってからでしょう」

お兄さんは指をぬいて——ベッドの上に転がしてあった、変なぼうをあたしに見せた。

真っ黒で、形は長さ30センチくらいのクシ団子。6個も連なっていて、大きさがひとつずちちがう。先っぽは2センチ未満で、だんだん大きくなって最後は4センチかな。そのクシ団子に小さなビンから、とろっとしたクズ湯みたいなのがたらされた。

クシ団子が、あたしの目の前から消えて。しりたぶを指で広げられた。これで、クシ団子を後門につっこまれると予想できなければ、バカだよ。

「アナルの力をぬいて。楽にしていないといたいよ」

アナルって初めて聞く言葉だけど、文脈で明白。いたいのはイヤだから素直にしたがった。

ツブ……うえ、気色悪い。でも、なんか生温かい。

ツブ、ツブ……二つ目、三つ目のお団子が後門におし入ってくる。後門がだんだんおし広げられていく。ちょっといたくなってきた。

ツブ……

「いたい。もう無理です」

あら。止めてくれた。

「それじゃ、このあたりで慣らしていこうね」

ズニュズニュ……二つぬいてくれた。

ツププッ……すぐに、またおしこまれた。

ズニュツプ、ズニュツプ……出し入れをくり返される。マンマンにチンチンを出し入れされたときと同じ。

あれ……？

なんか、ちょっと、気持ち良い？

ツプ、ツプ、ツプ……

「よし、もうひとつ入ったね。そんなにいたくはないだろ？」

「……はい」

いたいんだけど。出し入れで慣らされちゃったし。「そんなに」を付けられると、たしかに「そんなには」いたくない。

そうやって、30分ほどもかけて、とうとう最後のお団子まで入れられてしまった。

「これだけほぐれたら、もうだいじょうぶだね」

クシ団子が全部引きぬかれて。コシを持ち上げられて、頭をベッドに着けておしりを高く上げた格好にされた。犬が「遊ぼうよ」って飼主におねだりするときのポーズだ。これで、おしりフリフリとかしたら、「早く入れて」ってさそう意味になるんだろうな。それくらいは、あたしでも分かる。

そんなはしたない真似はしなくても。熱くて太くて固いやつが、しりたぶをおし分けて後門につき付けられた。

ググウッと強くおしこんでくる。後門がおなかの中へめりこむみたいなの、にぶいいたみというか不快感がつのる。これくらいなら平気だ……と、思っていると。

ズグブッ！

「いたい……！」

ロストバージンのときよりも大きなゲキツウが走った。引きさかれるというより、分厚いナタで強引にわられたような重たいゲキツウだった。そして、熱い。

「いたいいたいいた……あつい！ やめてよお！」

不覚にも、あたしは（親分の期待通りに）泣きさけんでいた。コンをつかまれているので、にげることもできない。

ズグズグズ……チンチンが、容しやなくおし入ってくる。でも、おなかの中は変な感じがするだけで、いたくない。後門だけが、いたくてあつい。

グニュッと、おしり全体が圧白された。あの長いチンチンが全部入って、お兄さんのおなか、あたしのおしりにつき当たったんだ。

「もうちょっと、泣かせてあげよう」

ズニュウウウ、ズググググ、ズニュウウウ、ズググググ……チンチンが出入りし始めた。

「あぐぐぐ、ひいひい……」

動かされるたびに、あたしは悲鳴とうめき声をもらす。

だんだんと出入りのピッチが短くなってきて。

パンパンパンパン……もうすっかり聞き慣れた、肉と肉とがぶつかり合うかわいた音が、部屋じゅうにひびきわたった。

ふっと、お兄さんの動きが止まった。チンチンは、入ったまま。

「矢作さん。そろそろ、クリを解禁してやっても良いんじゃないですか？」

何のことだろうと思っていると。お兄さんの右手がコシからはなれて、マンマンをさわりにきた。ワレメにそって指がスウッと上へ動いて。

「ひゃうんっ……？！」

ものすごくあまい電ゲキが、オマタに走った。

「気持ち良いだろ。女に生まれて良かったと、思い知らせてあげるよ」

クニョンクニョンと、ワレメの上はしのあたりを……つねられたのか、こすられたのか。そうされるたびに、あまい電ゲキが走る。

「ひゃんっ……な、なに、これ……？」

アナのふちをチンチンでこすられたときの、くすぐったい気持ち良さに似ている。でも、

その１００万倍は気持ち良い。１００万ボルト、ううん、１億ボルトだ。

こんな気持ちの良さを、あたしは知らなかった。気持ち良いじゃ言葉が足りない。そうだ、こういうのが快感……でも、足りない。カ・イ・カ・ンだ。

いったい、何をされてるんだろう。

うでをつつ張って頭をもたげて、下からのぞきこんだら。ワレメのはしっこに小さなイボみたいのがあって、そこをクニクニクリクリされてる。

「このままイカせてあげよう。クリだけじゃなく、アナルの味も覚えるんだよ」

お兄さんは左手もあたしのコシから放して……かみの毛をひとまとめにつかんだ。そして、チンチンの出し入れを再開した。

グッ、グッ、グッとかみを引っ張られて、ちょっといたい。

ズン、ズン、ズンとチンチンを出し入れされて、ものすごく熱くていたい。

クリ、クリ、クリとイボをこねくられて、１億ボルトがスパークする。

いたいんだかカイカンなんだか熱いのか、わけが分からなくなって……全部の感覚がひとまとめになって……

「ああああああああ……！」

さけんでいなければ、感覚のかたまりが暴発しそうだ。暴発したら、どうなるんだろ。すごくおそろしいことが起こりそうな予感。

でも。試してみる前に、お兄さんがチンチンをぬき去った。

つかまれて引っ張られていたかみの毛を放されて。あたしは、ベチャッとベッドの上でつぶれてしまった。

「最初のシツケがカンジンだからね」

お兄さんはあたしを転がして上体を引き起こし、まだ水平くらいまで立っているチンチンを、あたしのくちびるにおしつけた。リレーのバトンくらいの長さで、直径はバトン以上だ。こんなのが、全部、あたしの後門に入っていたなんて、信じられない。

「ユウちゃんが、下のお口でよごしたペニスだからね。上のお口でなめてきれいにしなさい」

い」

て……ええっ？！

親分のチンチンはなめさせられたけど、あれって、マンマンに入れる前のきれいなチンチンだった。よごれた……それも、おしりのアナに入れてた……ああ、そうかと思い当たった。だから、先にカンチョウをして水ですすいで、おなかの中をきれいにしてたんだ。

だけど、検ニョウに使ったコップをきれいにあらっても、それで水を飲むのはティコウがある。

「やさしく言ってるうちに言うことを聞いた方が、おまえのためだぜ」

親分におどされて。あたしは覚ごを決めた。毒を食らわば皿まで。チンチンをなめるってこと自体が、すごくバッチイんだ。きれいだろうと、よごれてようと、たいしたちがいない。それに、見た目には……やっぱり、よごれているよお。でも、ウンチじゃない。コンデンスミルクみたいな、白いネバネバがあちこちに付いてる。特に、キトウの先っぽ。オシッコが出る小さなアナのまわり。オシッコじゃないのは一目両然だけど。

なめてみたけど、まったくあまくない。ていうか、ほとんど味が無い。さとうを入れてないクズ湯のうすいやつみたい。ちょっとだけ、えぐ味があるかな。

ま、いいや。これなら、なめたって（味覚的には）平気だ。

親分にさせられたときと同じ要領で良いのかな。

アムアムペロペロシャブシャブ。

「ニョウ道の中にも精液が残っている。すい取ってくれよ」

えつつつ……精液??

精液って、赤ちゃんの種だよ。これが、そうなんだ。でも、赤ちゃんの種をおなかに入れて……スイカの種を飲みこんだって、おなかからスイカは生えてこない。それに、赤ちゃんができるのは生理が始まってからだって、親分が言ってたのを思い出した。

チュウチュウチュウ……うまくすい出せない。

チンチンはストローじゃない。チューブチョコの親せきかもしれない。でも、かんじゃ

ダメだったよね。

必要は発明の母。歯にくちびるをかぶせて、チンチンをしごいてみた。ちょろっと、精液が出てきた。

マムムヴ、マムムヴ、チュウチュウ……

何度かしごいて、すい出して。

「いつまでも口の中に留めてないで飲みこめよ」

うううう。どうか、赤ちゃんが生まれませんように。意を決して、ゴックン。のどに引つかかって、いつまでもいがらっぽかった。

「今のを、おそうじフェラという。ペニスで可愛がってもらった後のお作法だからね。言われる前に自発的にしたら、男は喜ぶよ」

可愛がってもらったんじゃない。いじめられたんだ。

「ビデオのシャクとしてはじゅうぶんなんだが。これで終わっちゃ、オレが面白くねえや」

親分が、例のタテジマスーツをぬぎはじめた。あたしを可愛がる……じゃない、いじめるつもりなのかな。

「あの……ボクは、ここで失礼されてもらっても、よろしいでしょうか？」

お兄さんが、遠りょがちにたずねる。

「かまわんよ。赤の他人にミソカ事を見せるしゅ味はねえからな。それに、こいつにおまえとオレの持ち物を比かくされちゃ、たまったもんじゃねえやな」

お兄さんは大急ぎで服を着始めた。

親分は対照的にゆっくりとぬいでいく。ワイシャツの下に、アンダーシャツは着ていないんだけど。着ていない物をぬいだ？

「えっ……？」

声を出してしまったのは、親分がイレズミをぬいだから。でも、ぬいだその下にもイレズミ。

親分が、あたしをふり返って、いたずらっぽく笑った。こういう笑い方もできる人なんだ。

「モザイク無しが、うらビデオの売りだからな。どんなにカメラアングルを工夫したって、クリカラモンモンは写っちゃう」

「……………」

言っている意味が分からない。でも、たいした問題じゃない。問題なのは、親分がどちらのアナをいじめるつもりかってこと。後門はいいだけでイヤだ。でも、マンマンのイボといっしょなら、いじめられてもいいかな。いっそ、マンマンとイボを同時に……は、むずかしいんだろうな。

「さつえいじゃないんだから、おまえたちも外で待ってろ」

親分は、皮ジャンの2人と3号のお姉さんも追い出そうとしたんだけど。

「あたいは立ち会うわよ。後でアドバイスとかしてあげたいし。親分を見張ってろって、おかみさんから言いつかってますから」

親分が苦笑した。

「ばあか。こいつはオモチャだぜ。だれが、口説いたりするもんかよ」

ずきん。なぜか、むねに小さなトゲが差さったみたいに感じた。杉長くんが他の女子とふざけ合ったりしてる時の感じに、似ていなくもない。なんて、遊長なことを考えてる場合じゃない。

親分はフンドシまでぬいで。あたしをベッドへ（ダッコなんかしてくれずに）追い上げて。あお向けにした。

マンマンの方だ。良かった——じゃなくて。良くないけど、マイナス200点よりはマイナス150点の方が、まだもしだって意味。

ところが、あたしの安心を親分はあっさりとうら切って——後門だった。

前のビデオさつえいで最後にされたみたいに、あおむけで身体を真っ二つに折り曲げられて、真上からチンチンをつっこまれた。

お兄さんのチンチンよりは細くて短いのに、お兄さんよりもいたかった。角度がちがうせいなのか、親分のキトウのカリクビはお兄さんとちがって、半球形のイボがいくつもコボコしているせいなのかな。

それに、ワレメのはしっこのイボもかまってもらえなかった。

あたしは、もうガマンする気力もなくなっていて。いたいいたいて、手放して泣きさげんじやった。

親分も、あたしの中へ白いトロトロの精液を注入して。あたしは、おそうじフェラをやらされて。

「後の面どうは、見てやってくれよ」

親分は、お姉さんとあたしを置き去りにして、とっとと出てった。

あたしは、もう1回バスルームで全身を清めてから。お姉さんに軽自動車で家まで送ってもらった。と中でファミリーレストランへ寄って、今度は駐車場からお店へ入るまでに考えておいたので、お姉さんがお子様ランチを注文する前に、ハンバーグセットを自分で注文できた。

それと。これは、さすがにレストランの中では他人の耳があるので、運転中のことだけど。セックスというかHのことについて、お姉さんが少し教えてくれた。

ワレメのはしっこのイボはクリトリスといって、経験の浅い女の子が最も感じるピンポイントだとか。おそうじフェラなんて、男に強いられて、しぶしぶするものだとか。

「しょう来、カレ氏ができたときに、たのまれもしないのにやってごらんなさい。よっぽど遊んでる女だと思われるわよ」

親分は、ユウちゃんのことをロリビッチに仕立てるつもりらしいから、気をつけるのよ——と言われても、意味不明。ロリコンとかビッチとか、聞いたこともないH用語をイチから教わらなければならなかった。

でも。あたしは、6年生でさえも（多分）経験していないセックスを、アナルでまでさせられたんだもの。ビッチそのものじゃないのかな??

野外でさつえい

「ユウちゃん。なんだか変な歩き方してない？」

クラスメイトの^{しのゆに}信濃優仁ちゃんに指教的されて、ドキ。

「そうかな？」

「うん。おしりを後ろへつき出したり引いたり、左右にくねらしたり。セクシーな歩き方の練習をしてたりする？」

「そんなんじゃないよ。ちょっと、むずがゆくて。ギョウチュウの検査をした方が良いかな」

「やだあ」

あぶないあぶない。アナルがいたいとかむずがゆいとか、それは本当なんだけど。

原因は分かり切ってるものね。ユニちゃんに（でも、だれにでも！）知られるわけにはいかない。

ユニちゃんは、あたしをよく見てる。先週の月曜だって、ガニマタで歩いてるって指教的なもの。あのときは、マンマンにぶっといチンチンが差さってるような感じが続いてて、よほど気をつけないとガニガニで歩いてた。

ユニちゃんは名前があたしと似てるってのもあって、大の仲良し。でも、性格とかは正反対。ユニちゃんの得意科目は音楽と家庭科で苦手は体育と図工。あたしがオトコ女なら、ユニちゃんはオトメ。デコボココンビってやつかな。

それに引き換え、パパは……あたしに、あんな非道いことをさせておきながら、一から十まで原因を作っておきながら。まるで気使ってくれない。いや、ハレモノにさわるみたいな分囲気かな。そして、子どものご気元を取るには遊園地かデパートの食堂だと思いこんでる。オマタに大ケガ（は、おおげさだけど）をしてるときに、外出させるつもりなん

だからね。

「あたしは、どこへも出かけたくない。だいいち、お金がかかるでしょ。まだ300万円も借金が残ってるのよ。ムダ使いはやめて、パチンコも競馬も競輪も競ティもやめて、外出するんならお仕事をさがしてよ」

うんときつく言ってやった。だけど、これまでだって口に梅ぼしをほお張ったくらいに酸っぱく言ってるからなあ。さつえいのとき、付きそってもらった方が良かったかな。むすめが非道いことをされてる現場を見たら、心を入れ変えてくれたかもしれない。

——むすめが非道いことをされてるのを、パパは目の当たりにすることになった。アナルセックスのさつえいから5日後に、これまでに作られた2本のうらビデオが、皮ジャンの人の手でとどけられたんだ。

パパはお仕事さがし（が名目だけなのは、ほぼ分かってるけど）に出ていて、あたしが受け取った。

カセットを見て、悲しいんだか笑っちゃうんだか。ビデオ屋さんで売ってる製品とはちがって、パッケージは無しでカセットの背中にフェルトペン書きのシールが張り付けてあるだけ。

『娼孝女ユウ〜末潮の破瓜』

習ってない漢字が多いので漢字辞書を引いた。「末潮」なんて国語辞典にも乗ってなかったけど、初潮は知っていたし「破瓜」は分かったので、なんとなくつながった。でも、前半はふざけてる。小公女のパロディだ。セーラちゃんが泣くよ。ガンダムだって泣くぞ。

2本目は、まだ本編は編集集中のラッシュアワーで、背中には紙テープが張られていた。

『娼孝女ユウ〜肛姦日記』

ひょっとして、シリーズ物にするつもりかな。

500万円÷100万円=5だものね。

もらったビデオは、見たくもない。でも、パパに見せて反省してもらうためには、内容を知っておかなくちゃ。ということで、再生したけど。

顔から火が出るどころか、全身が燃えちゃったよお。火事を消そうとしたのか、オマタのおくがジクジクになって、ワレメからも水がこぼれた。

さすがに、パパといっしょに観賞する気にはなれないから。

「あたしがどんなに非道いことをされたのか、絶対に最後まで見てよ」

2本目の前半の木馬遊びとかツイスタゲームとかは、あたしが演技でニコニコしてるから非道くはないけど。でも、ウンチまみれのシーンもちゃんと写ってるから、やっぱり悲惨だよ。

「つらい思いをさせて、本当にごめんな」

次の日に、そうは言ってくれたけど。

「なんとか、あと3本がんばっておくれ」

チョウさんの決めセリフじゃないけど……ダメだ、こりゃ。

アナルセックスのさつえいから2週間。月曜日の体育の日に運動会があった、その6日後の日曜日。

あたしは黒ぬりベンツで、となりの県にあるフィールドアスレチックの公園へ連れてかれた。皮ジャンさんのわかい方がハンドルをにぎって、助手席にはポロシャツにジーパンの、初対面のまあ小父さんかな。プロのカメラマンさんだと、親分に照会された。後ろのシートには、真ん中があたしで右側に親分。左側には、もう顔なじみといって良いほどの、小父さん皮ジャン。

3号お姉さんの軽自動車ともう1台、キャラバン車がついて来てる。キャラバン車には、あたしと共演するサオ役っていう男の人が何人か乗っている。

サオっていうのは、チンチンのことなんだね。今回は、大勢のサオ役さんと（親分の言い方だと）くんずほぐれつの大らん交をさせられるそう。イタマがあたくなる。きっと、オマタもいたくなる。それとも、大勢にクリトリスを可愛がってもらって、1億ボルトがスパークするのだろうか。

公園には人かげがなかった。2年前の春にオープンしたけれど、交通の便は悪い（自家用車だけ）し、近くに温せんとか名所とかもないし、1年も持たずにつぶれちゃったんだって。そのうち、この一帯は有望な別荘地になると見こんで、大手デベロッパーという会社が二束三文で買いたたいて、矢作組よりずっと大きなヤクザ屋さんが管理を受け負って、そこへ仁義を通して、あたしのために（と、親分は言った）借り切ったんだって。

つまり。前のビデオと同じで、前半はあたしがムジャキに遊ぶシーンなのかな——という予想は、半分当たったんだけど。その前に、まずは着変え。

アスレチックてのは運動のことだから、それにふさわしく体そう服……なんだけど。スケスケの三角ひもビキニと同じだった。ノースリーブでおへそまでとどかない体そうシャツと、オマタのY字形もヒップも、上半分が出てしまう極端に短いブルマ——を、下着無しで着なくちゃならなかった。

それも、共演する男の人が、ひのふのみの……6人に取り囲まれながらだよ。もう慣れっこで。

はずかしさも

中くらいなり

おらがハレンチ

なんてね。

やっぱり、最初はあたしひとりが遊んでるシーンから。

木の角材を組み合わせて、とにかく大きいジャングルジム。高さは、（ペンキがはげかけてサビのういた）カンバンの説明板によると5メートル。角材は鉄ぼうより太くて、ワク組も大きい。身長150センチ未満は遊技禁止になってる。あたしは143cmだからアウト。でも、オトナなみにセックスを経験してるからOK（そういう問題じゃない）。

とにかく、1コマずつが大きいから、登るのもひと苦労。体育5の面子にかけても登り切った。大マタ開きの連続だから、ゴムボールで遊ぶよりはHな絵になったんじゃないかな。ウラ地のないブルマだから、ワレメの形もくっきりうかび上がってるし。

ジャングルジムは10分くらいで切り上げたところで、プロのカメラマンさんから注文がついた。

「ヘアーが顔にかかって、表情がわかりにくいんだよね。ツインテにしてくれる？」

「こんなこともあろうかと。ちゃんと用意してあるわよ」

お姉さんからヘアゴムとピンクのリボンをもらって、ツインテールにまとめた。文脈で、ツインテというのがツインテールだとすぐに分かったけど、カメラマンさんは業界人というやつ？ 話し方が、それっぽい。

かみを結び直して、またジャングルジムで10分間のさつえい。

たいした運動量じゃなかったもので休けい無しで、すぐに次のシーンはツナわたり。1本の太いツナを木から木へわたるんだけど、同じツナが頭上にも張ってあって、これをつかめば初心者でもだいじょうぶ。

上下のツナの間に、真新しい3本目のツナが張られていた。

ツナが張られている木に、横のハシゴから登った。カメラマンさんもついて来る。

カメラマンの小父さんは、コシに安全ベルトをまいて、ベルトのスリングを上ツナに引っかけた。これで、足をふみ外しても安全。スリルを味わうために、50センチほどは落ちるけれど。

あたしは、安全ベルトを着けさせてもらえなかった。その代わりに、両手を前でひとまとめにして平たいスリングでしばられた。つい落のショックでほどけないようにと、クロスさせた手首を十文字にしばるという、念の入れ様だった。

2人の皮ジャンさんが、ビデオカメラを地上で構える。3号お姉さんと6人のサオ役さんたちは、カメラアングルに入らないように、はなれた所から見物している。

カメラマンさんは先に、後ろ向きになってツナをわたり始めた。

「コシの高さに張ってあるツナをまたぎながら、ツナわたりをしてね」

あたしは何の疑問も持たずに、男女親分子分合わせて11人（いる！）の目の前で、言われた通りにした。

足を上げるとバランスをくずしそうになるので両手を上げて……上のツナに手がとどかない。この設備も身長制限があったね。スリングをつかんで、身体をうかして足をいっぱい上げて、ツナをまたいだ。

あ、そうか。こういうのって、小さな子が一番喜ぶ遊具だよな。なのに身長制限なんかしたから、不人気だったんだろう。なんてことは、どうでも良いや。

うでの力をゆるめると、ツナがオマタに食いこんでくる。ブルマの生地がうすいしノーパンだし、すごく生々しい感覚だ。

そろっと左足を前へ出して、いよいよツナに乗った。右足を前に出すと……

グリ……ツナがワレメをこすった。

「ひゃ……」

ビクンとコシがにげた。これ、電気が走る。ちょっといたいのと、かなりくすぐったいのと、同じくらいに快感なのと。1千ボルトくらいかな。

うでに力を入れて身体をうかすと、もちろんツナをふめない。軽く体重をかけているくらいだと、足がすべって前へ進めない。

カメラマンさんはあたしより背が高いから、オマタの下をツナが通りぬけてる。こすったところで、ズボンの生地は分厚いから、何も感じないんだろうな。ずるいや。

もう、ニコニコ演技してるどころじゃない。

コシがビクッとなってツナをふみ外さないように、覚悟を決めて気合をいれて、ツナの上をソロリソロリと歩く。

一步ごとに、ビリビリと電気が走る。

カメラマンさんは右手でカメラを構えてレンズを上げたり下げたりしながら、左手で上のツナをつかんで、あたしに合わせて後ずさっている。レンズを上げたときは全身ショットで、下げたときはオマタのクローズアップなんだろうな。

カメラマンさんだけじゃない。2人の皮ジャンさんも下でカメラを構えて、横から後ろからあたしにレンズを向けている。

でも、そんなの知ったことじゃない。

「くううう……」

あたしは、うめき声をガマンできなくなった。

せんたくロープって、せんたく物をはしっこにほしてもピンと張ってるけど、真ん中の方にほすと大きくたわむじゃない。あれと同じで、あたしが前へ一歩すすむたびに、あたしが体重を乗せているツナが下へたわんでいく。だから、またいでいるツナが、どんどんオマタに食いこんでくる。

もう、まるでブルマからツナが生えているみたいになった。

食いこんでくると、それで歩くと、電気がどんどん強くなって……軽く10万ボルトをこえてるかな。だけど、10万ボルトのうちで、いたいのが2万ボルトでくすぐったいのが4万ボルト。快感が6万ボルトだ……こんなかんたんな足し算をまちがうくらい、頭がポワンとしてきてる。

「はい、そこでストップ。立ち止まったまま、オマンコをロープにこすりつけようね」

そんなことをしたら、10万ボルトが100万ボルトになる。ので、素直に指示にしたがった。

ビリビリなんてものじゃない。

バリバリズガガン。コシがぐだけて、ツナをふみ外してしまった。

とたんに、グウウツとさらにツナがマンマンに食いこんでくる。100万ボルトが1億ボルトまではね上がった。

「あうう……いたいのに、きもちいいよお！」

さけんでしまった。

「そこらへんで、やめとけ。まだイントロだ。マンコをすり切ったら、後がつらいぞ」

はふうう。助かった……それとも、ちえええ？

あたしは、マンマンに食いこんだツナに支えられて、身体は60度くらいかたむいてる。上のツナに引っ張られているうでを曲げてスリングをたぐり寄せようとしたけど、う

まくいかない。

ジタバタしてると、カメラマンさんがもどって来てスリングを引っ張り上げてくれた。地上からも、年上皮ジャンさんが足を引っ張ってくれて。おきあがりこぼしの心境。

年下皮ジャンさんが、オマタに食いこむように張られていたツナを少しだけゆるめてくれたので、マンマンがスカスカになった気分。おかげで、ヨロがアジアシしながらでも、ゴールの木までツナわたりできた。

ここで、小休止。

「ちょっと見せてね」

お姉さんが救急箱を持って来て、地上に下り立ったあたしのブルマをずらした。

あたしは逆らわない。ブルマごしとはいえ、さんざんこすったんだもの。すりキズになっているかもしれない。でも、その心配はなかった。

「早めにストップをかけて、正解だったわね」

あたしにではなく、お姉さんは親分をふり返って。

「生地がすり切れてるわ。ぎりぎりセーフってところかしら」

「それだけぬれてりゃ、どれだけ続けてもだいじょうぶだったろうぜ」

ブルマは真ん中が立てにさけていて、そのまわりがしみていた。こん色でもはっきり分かるくらいだから、グショグショって表現がふさわしいね。

1か月前だったら、いい年をしておもらしをしたと感じがいい……は、しなかったかな。Hなことを考えると、パンツがしめったりはしてたもの。

「正午までは、まだ少しあるな。パート・ワンはとり終えておこう」

ということで、休けいは15分ほどでおしまい。あたしたちは、別の遊具の所へ行った。

公園にあるやつの5倍くらいの、大きな丸太のシーソー。いよいよ、サオ役さんたちと共演するのかなと思ったら、あたしひとりで遊ぶんだった。のは、別にかまわないんだけど。

キノコの輪画みたいな形のグリップが、かた側に10個ずつある。つまり、全部で20

人が乗れる。その後ろから2番目の席にすわれと指示されて。これは、素直にしたがえない。

だって……その席には2本の太い枝が直角に生えてる。んじゃないくて。大小のスリコギがつき差さってる。真新しい。

「あの……これ、本当に……？」

親分が無言であごをしゃくった。

うううう……無理だよ。すわる向きから考えて、マンマンに入れる方のスリコギは、親分の（大きく固くなった）チンチンと同じくらいで。後門の方は、前回のサオ師さんの（大きくなる前）よりも細くて短いけれど。2本まとめてだなんて……

「まだるっこしいな。オレが手伝ってやるぜ」

親分が、後ろからあたしを羽交いじめにした。それだけで、軽々と持ち上げられた。

「だれか、手伝ってくれ」

遠まきにしていたサオ役さんたちが、わっとかけ寄って来る。

「はい、ストップ。あんたとあんたにお願いね」

お姉さんが仕切って、2人だけを通した。

その2人が両側からあたしの足をつかんで、大また開きさせた。

「じゅんかつしてあげるね」

お姉さんが小ビンからトロツとした液体をスリコギにたらして、ニユルニユルとまぶした。

その上へ下ろされていく。テイコウしてもオトナ3人の力には適わないし、100万円のために、あたし自ら進んで（だったかなあ？）出演を引き受けてるんだ。テイコウして泣きさけぶのも、親分に言わせると「絵」になるらしいけど。そっちの方がはずかしい。

ブルマはぬいだままで、体そう服の上だけっていうのも、スッパダカよりははずかしい。

ニョルンと、太い方のスリコギがマンマンに入ってきた。ちっともいたくないどころか、なんか気持ち良い？

小さい方のスリコギが、おしりに当たった。でも、アナルの位置から少しずれている。

「いたいです。アナとずれてます」

「おお、そうか」

親分がひざであたしのコシをおした。ますますずれる。ひざを放して身体全体を後ろへ下げて。また、ひざでコシを前へおす。

ユッサユッサと小さきみにゆすぶりながら、じわっとあたしを下げていく。

ズボ……すごい勢いで、アナルにスリコギがつき差さった。

「いたいっ……！」

最初にアナルをチンチンでつらぬかれたときと同じゲキツウとシャク熱。

「勲雄のチンポよりか、ずっと小さいんだ。おおげさにわめくな」

あれとこれとは、全然ちがう。マンマンに入ってるスリコギにこねくられながら、アナルまでこねくられる。2本のスリコギにサンドイッチにされて、ふたつのアナの間の肉がおしつぶされてる。

「なかなか入っていかねえな」

でしょ。無理なんだよ。

でも……ミシミシギチギチと肉をきしませながら、だんだんとスリコギが身体のおくまでおし入ってくる。

とうとう、あたしのおしりがシーソーの丸太に乗かってしまった。

「転落したら命にかかわるからな」

コシにナワをまかれて、後ろのハンドルにしばりつけられた。両手は前のハンドルに。

サオ役さん2人が反対側でシーソーをおし下げた。

グウンと、あたしは2メートル以上も持ち上げられる。ジャングルジムほどじゃないけど、まわりにワクがないから、かえってこわいほどに絶景かな。

シーソーの反対側に、大きな岩が乗せられてしばりつけられた。親分が手応えをたしかめて、小さめの岩が追加された。

シーソーから完全に手がはなされて。じわあっと、あたしの側が下がっていく。だんだん加速がついて。

ドンッ！

「ぎゃああああっっっ！」

アナのおくまでショックがつきぬけて、いたいばっかりの電ゲキが1千万ボルト。

「ひいひいひい……」

悲鳴交りのうめき声が止まらない。

「だいたいのつり合いはとれているな。ひとりでギッコンバタンして遊べ」

じょうだん。こんなゲキツウを自分で自分にあたえろっていうの？！

そうでもないかな。ひとりで地面をけったくらいじゃ、あんなに高くは上がらないだろうし、着地のしゅん間に足を曲げてショックをやわらげれば良いんだ。

おそろおそろ、地面をけってみた。ちょこっとうき上がって、すぐに着地。

「もっと大きくゆらせ」

足を開いて強くけった。

ビリリ……電気が走った。せいぜい1千ボルトくらいだし、6百ボルトくらいは快感が混じってる。電気の余音が消えたところに着地。そろえてのばした足が地面にふれたしゅん間にひざを曲げて……3千ボルトくらいの感電。ひざのクッションと開へいにつれて、マンマンとアナルの中でスリコギが動いた——実際に動いたのは、あたしのコシだけど。

わりと気持ち良かったので、今度は思い切り強くけってみた。

グウンと身体がうき上がって、前のめりになって、その分、スリコギに前後をこねられた。

「あんんっ……」

快感だけの1千ボルトが走った。

シーソーが下がり始めると、身体が後ろへかたむいて、また1千ボルト。うまく着地したけど、足を開いて走った電気が、これも快感だけの5百ボルトくらいかな。

次は、思い切り強くけったのは同じだけど、わざと身体を大きく前へかたむけた。

「あんんっつ……」

2千ボルトだ。

着地のときには、足の力をぬいて、丸太のはしを地面にぶつからせてみた。

ズウンとつき上げられて、1万ボルト。いたかったけれど、おなじくらいに快感もあった。ので——力いっぱいにつけて高く上がって、とちゅうで前後に身体をかたむけて、着地は足に力を入れない。ズウンとつき上げられると同時に、足が強制的に曲げられるから……ああん、いたいけど快感だよ。

あたしは何度も何度も、夢中になってシーソーをくり返した。

ストップがかかったときには、頭の中に白いモヤがたなびいてた。

「1時間の休けい。昼飯だ」

キャラバン車からお弁当が運び出されて、みんなに配られた。

あたしは食事の前に。マンマンとアナルを中心に身体をふいて。タオルが茶色によごれたのが、一番はずかしかった。なんで、今日はカンチョウをしてくれなかったんだろ。スリコギとあたしの身体がよごれるのは、かまわないんだ——ちょっとスネた気分。

お弁当は、と中の駅で買いしめてきた、まくの内。ちゃんと、土ビン形プラスチック容器のお茶も付いてた。

「ユウはたくさん運動して、のどがかわいてるだろ」

あたしだけ、カンジュースをもらった。親分に名前をよびすてにされたのは初めて。オマエってよばれるよりは、うん、うれしいかな。ユウちゃんよりも、かもしれない。

食後の（オトナは）一服が終わると、パート・ツウのさつえい。今度はサオ役さん全員と、最初はやっぱりフィールドアスレチックから。

全員が一糸まとわぬハダカになって。あたしは素足だけど、サオ役さんは一足まとってゐる。

遊具に囲まれた草地の広場でおにごっこ。ただし、ふつうとは逆で、オニが6人、子が

1人。大のオトナがにげ回る小ムスメをつかまえて……ムニャムニャ。

さっさとつかまって、さっさと犯されてやれ。と、良からぬ(?) 考えていたのに。

「おまえは、体育だけは5なんだってな。つかまるまで10秒毎に1千円の賞金を出してやる。現金だ」

5分間にげ切ったら、3万円。このうらビデオのさつえいが終わっても、借金は200万円も残る。焼石に水だけど。借用書の書き変えでなく現金ってのが味力だ。こここのところ、お小使いをもらってないし、あたしにとっては、1分の6千円でも大金だよ。

この際、「体育だけは」なんて、小バカにされたっていいや。事実だもの。

5メートルほどはなれて、あたしを6人が円形に囲んだ。こんなの、にげられっこない——ことは、ない。直径10メートルなら、円周は30メートル。6本の植木算だから、間かくは5メートルもある。フェイントですりぬけてやる。

「ヨーイ、ドン」

ストップウォッチをにぎった親分のかけ声で、6人がいっせいに……じわじわと輪をちぢめてきた。間かくがせばまるのは、まずい。

くると向きを変えて、目の前に見えたやつに向かってとっ進した。

「わああああっ！」

そいつは足をふん張って両手を広げ、あたしを受け止める構え。

あたしは両側の動きに注意を向けているひまはない。そいつの左側へ、ヘッドスライディング。

ズザザッ……いたい！

草っぱらだから思い切ったんだけど、ハダカでは無茶だった。でも、とっさのもくろみ通り。正面のやつは動けない。

横をすりぬけて、ヘッドスライディングの勢いを残して前へ転がって、素早く立ち上がった。そのままにげようとしたんだけど。

「おりゃあ！」

左にはなれていた人が飛びかかってきて、足をつかんで引きたおされた。

「回転レシーブの真似事だろうが、こっちはラグビーできたえたタックルだぜ」

いかにもスポーツマン体格のお兄さん。別の時と所なら、素敵なお兄さんだなと思うかもだけど、今はきらいだ。

「15秒。賞金が1500円ではかわいそうだから、1万円をはずんでやろう」

親分が声高らかに、ふくみ笑いしてる。

「ボクには賞金が出ないんですか？」

ラグビーのお兄さんが、負けない大声でたずねる。

「分かり切ったことを聞くじゃねえ。そのために集めたおまえ等じゃねえか」

「あ、やっぱり。それじゃ、遠りよなく」

ラグビーお兄さん（面どうだから、ラグビーさんでいいや）は、うつぶせになってるあたしのコシをつかんで持ち上げて……あたしの足の間にわりこんできた。

ああ、やっぱりか。もう、おびえたりはしなかった。身体を強張らせてたら、いたみが増すだけなので——好きにしてちょうだい。グテッとだつ力した。

あれ……？

思ってたよりも、ずっと高く持ち上げられた。自分の足で立ってなきゃいけない。ほとんど前くつ運動。

ペッ……

息といっしょにツバをはきかけられた。別にケンカを売ってるとかじゃなくて、マンマンをぬらしてチンチンをつっこみやすくしたんだ。でも、すごくブジョクされた気分。

ズンツッ、ニュグウ……チンチンがー気におくまで進入してきた。ツバのおかげで、まったくいたくない。ちょっとくすぐったくて、ちょっと気持ち良いかな。身体の中におし入ってくる岩感には、まだ慣れないけど。

「ひとりじめは、ずるいぜ。オレがブロックしたから、そっちへ転げこんでくれたんだろ」

あたしがとっ進していった相手が、不平を言った。

「ん？ ああ、どうぞ」

答えると同時に、ラグビーさんはあたしのかみをつかんで、ななめ後ろへ引っ張った。

「いたい……」

もっと大切にあつかってよという意味の「いたい」だった。スリコギをマンマンやアナルに入れるのとは、言葉は同じでもいたさのケタがちがう。

「いたいなら、自分で動けよ」

さらに引っ張られて、あたしは上体を水平まで起こして、かみを引っ張られる方へ頭をもたげた。

「なるほど。そういうことか」

どういうことかは、すぐに分かった。

デスター総統バンザイのチンチンが、口元につきつけられた。

前門のトラ後門のオオカミってやつだ。^{アナル}後門は空いてるけど。

セックスとフェラチオを同時に、か。きっと「絵」になるんだろうな。マンマンとアナルみたいになり合ってはいないから、あんなにきつくはないだろうし。

ブロックさん(?)は、おそろおそろみたいな感じで、それでもチンチンを根元まであたしの口へおし入れた。

ブロックさんが目の前に立ってくれたので、コシにしがみついた。

なめたりすったりしなくちゃいけないんだなと思ったけど。始める前に、ブロックさんが自分でチンチンを出し入れし始めた。

これは、楽で良いや——と、思ったけど。自分で加減ができない。のどのおくまでつこまれると、ゲエしそうになる。

「おっと。こっちも負けちゃらんねえな」

ラグビーさんも、チンチンを出し入れし始めた。

両手でツインテールをにぎったままだから、引っ張られて頭をガクガクゆすぶられる。口の中のチンチンが、前後だけでなく上下にも暴れる。

「むゝぶ……もゝぼおゝおゝお……」

苦しい。ツインテールなんか放っというて、クリトリスをつまんでこねくってほしい。でも、口がふさがってるので、しゃべれない。

なんとか分かってくれないかなと、おしりを左右にふってみた。

「おほお。感じてるのか。とんでもないガキだな」

ズンズンズンと、はげしくつかれた。

しょうがないや。これは、お仕事なんだ。お仕事って、楽しいもんじゃないよね。

何十回か、身体を前後にはげしくゆすぶられて。マンマンはちょっぴり気持ち良くて、フェラチオは気持ちが悪いだけ（と、息苦しい）。2人とも、さっさと終わってくれた。口の中に出された精液は、はき出すのはお作法に反するってお姉さんにたしなめられて、ゴックン。2度目だけど、まったく慣れない。味はそんなにしないけど、のどがイガイガになるのが気色悪い。

おにごっこのシーンが短いと親分が判断して（あたしも、そう思う）。今度は、あたしもサオ役さんも賞品無しでさつえいした。あたしを半円形に取り囲んで。いっせいにつかまえて来たから、開いている方へにげて。どっちも気合が入らなくて、チンタラにげてチンタラ追いかける。

なんかさあ。こういうのって、アニメとかCMであるよね。「わたしをつかまえて」って女の人がにげて、男の人が追いかけて。ウフフとかアハハってやつ。背景は海辺の夕日だったりするやつ。あれは、男女のアベックだけど。

これで、親分とカメラマンさんの言い方だと——シャクをかせいだ。

チンタラオニゴッコは、つかまってもセックスにはならなかったので、すぐに次の遊具——は、箱ブランコ。ベンチが向かい合ってて、ゆれ動くゆか板でつながってるやつ。サオ役のひとりがリンクキコウとか言ってた。

あたしがゆか板に四つんばいで乗って。両側のベンチにサオ役がひとりずつすわった。目の前に、ボッキ（というんだそうだ）したチンチン。またしても、前門のトラ後門のオ

オカミ。

今度は、本当の後門にチンチンを入れられた。そんなにいたくも熱くもなかった。慣らされちゃったのかな。それとも、さっき前門にチンチンを入れられて、こねくられて、ちょっとはHな気分になってるせいかな。

とにかく。お口とアナルにチンチンを入れられて。サオ役さんが、ブランコをこぎ始めた。積極的に身体をゆするから、自然とチンチンが出入りする。だけじゃなくて。ブランコがゆれ始めると、ゆか板が前後に動くし、ベンチもかたむく。

すわってる人は平気だろうけど、ゆかで四つんばいのあたしは、頭が（おしりも）上がったり下がったり。サオ役さんのコシの動きよりも大きくチンチンが出入りする。そして、こねくられる。

ゆれがどんどん大きくなって、あたしは乗り物よいしそうになった——ところで。

「ちっと、もだえ方が足りねえな」

「クリちゃんをかまってやらないからよ。あなたたち、お豆ちゃんをいじってあげて」

「おっと、わすれていた」

アナルに入れているほうのサオ役さんが、コシの動きを止めて、クリトリスをまさぐった。

つままただけで、10万ボルトくらいの電気が走る。

「んんっ、んんん……」

口にチンチンをつっこまれてるせいで、鼻声になっちゃった。

「おおっ……一丁前にしめつけてくるね」

オマタがキュンッとしたのは、あたしの感覚だけじゃなくて、キン肉も反応したんだ。

マンマンをキュッとしめると、男の人は気持ち良くなる。もしかしたら、重要な豆知識かもしれない。つらくて早くやめてほしいときは、しめつけて気持ち良くさせて、とっとと精液を放出してもらう。放出したら、男の人はすぐにはなれてくれるから。

使えない豆知識だ。クリトリスを可愛がられたら、早くやめてほしくなくなるもの。

「オレも応演しよう」

あたしの前にすわってフェラチオをさせているサオ役さんが、身をかがめて——あたしの、ささやかなチクビを二つともつまんだ。

クニクニと指のはらで転がされて、こっちも1万ボルトくらいの電気。

「んんんん……んんんんーっ！」

すごくカイカン。アナルはちょっとだけいたいけど、それがおしる粉のかくし味の塩みたいになって、カイカンがはね上がる。

だけど、100万ボルトとかにはならない。マンマンにチンチンが出入りするピッチがおそいせいかもしれない。

それは、サオ役さんも同じみたい。じきに、ベンチからコシをうかして。ブランコのゆれよりもずっと速く、チンチンを出し入れし始めた。そして、すぐに放出した。

「うげ。よこれちまった」

アナルに入れていたサオ役さんが、ぼやいた。

まさか、ウンチの付いたチンチンをおそうじフェラ……は、させられずにすんで、ホッとした。

「数が足りねえな。^{しゅうえい}秀英、やってくれるか？」

「ありがてえ。これで、社長とアナ兄弟になれます」

「アホウ。てめえは、ケツマンコだ」

なんか、良く分からないやり取りだった。

また、臣大シーソー。

でも、スリコギの二番せんじではなくて。サオ役のひとりが、真ん中であお向けになった。手を頭上へのぼしてハンドルをつかみ、足を反対側のハンドルへ引っかけた。

「またがって、自分ではめろ」

すごく（というほどでもない？）イヤな予感。とにかく、言われた通りにする。最初のさつえいで、後ろ向きは不評だったから向かい合ってまたがった。

「身体をたおせ」

平らなゆかじゃなくて丸太なので、手の置き所がない。のは、すぐに解決した。6人目のサオ役さんがシーソー（と、あお向けのサオ役さん）をまたいで立った。あたしは、そのコシにだきついて、言われなくてもチンチンを口に入れた。

秀英とよばれた年下皮ジャンさんが、あたしの後ろに立った。やっぱりだ。ちょっとイヤな予感は当たってた。アナルへチンチンを入れられた。

「むぶうう……」

ちょっといたくて、ちょっと熱くて。オマタもおなかもギチギチのパンパンって感じ。スリコギ2本よりもきつい。

親分の指示で、足をうかして丸太にからめると、さらにきつくなった。

でも、ねそべってるサオ役さんが、マンマンへ手をのばしてクリトリスをいじってくれたので、ギチギチのパンパンも、そんなに苦にならなくなった。

もうひとりのサオ役さんも、チクビをかまってくれる。

「それじゃ、エクスタシーソーの始まりだ」

親分の意味不明な号令で——皮ジャンさんが、あたしのコシをつかんで、ひざをクッションさせ始めた。それにつれて、シーソーがギコンバツタンする。

ズンッ……あたしは足を丸太にからめてるので、シーソーの着地のショックでもろにつき上げられる。

グニョングニョ……シーソーがうき上がるにつれて、下の人が向こうへずれて、あたしはコシをつかまれているので動けずに、マンマンがチンチンにこねくられる。あたしが前のめりになるから、口の中のチンチンがいつそう深くのどをえぐる。

ニョググニョ……シーソーが下がる時は、その反対。

箱ブランコより、もっとゆっくりだから、チクビとクリトリスを可愛がってもらっても、そんなに気持ち良くない。カ・イ・カ・ンどころか、快感と言うもおろかなり。フキンシンきわまれり、だよ。こんなときに、ママのおそう式のときのお経を思い出すなんて。

あわれというも中々おろかなり……アナかしこアナかしこ。

思い出しちゃったものだから。一気に、ワレに返っちゃった。なにが「アナかしこ」なのよ。ものすごく悲しくなって……ナミダが止まらない。

「これはこれで……楽しそうだったのは、実は強制された演技で、その内面は……そういう方向へ持っていけますね」

カメラマンさんが、勝手なことを言っている。

「思い絵書いていたストーリーとちがってくるが……まあ、機道修正も悪くねえかな」

さっぱり分からないけど。泣いたら泣いたで、それも利用されるんだ。それだけは分かった。

「それじゃあ、機道修正ついでに、こんなのはどうだろうな？」

親分がカメラマンさんに耳打ち。

「面白いですね。でも、あれをバラすのは大変でしょう」

「こんなこともあろうかと。準備万単おさおさおこたりねえやな」

思い出した。3号さんも同じ言い回しをしてた。たしか、男子がもり上がってたアニメの決めセリフじゃなかったっけ。

カッコいい(?)セリフのわりに、駐車場のベンツから年上皮ジャンさんが取って来たのは、スパナとかノコギリとか。親分みずから工具を手にして、2人の子分にも手伝わせて、ジャングルジムの一部をこわし始めた。いずれは全部取りはらって別そうを立てるんだから、かまわないんだろうな。

ジャングルジムの外側、中のワクを何コマか取りはらった所に向かって立って、あたしはしばりつけられた。上体を水平にたおして両手を広げて、後ろ向き。両足も開いてしばりつけられて。おしりを後ろへつき出した、まるで「ここへチンチンを入れて」って、さそってるみたいなポーズにされた。この形をギロチン張り付けというんだそうだ。

全然ちがうと思う。世界史なんか習ってなくても、マリー・アントワネットは『ベルイサユのバラ』で知ってる。

そんなことは、二の次の次の次だ。あたしの目の前のジャングルジムはコマがなくなって、人間が立っていくらかは動ける空間になっている。これまでにされたことを考えれば、これから何をされるか、明白だった。

でも、6人（年下皮ジャンさんを数えれば7人）とも、すでに精液を放出している。オシッコとちがって、出してすぐに、また出せるんだろうか。なんて、あたしが心配することじゃない。

最初にあたしを犯した（のか、可愛がったのか、いじめたのか）2人が、あたしの前後に立った。さっきとは逆で、正面がラグビーで後ろがブロック。年上の人たちだけど、もう「サン」付けしたくない。

あっさりと、後ろからマンマンに送入された。この形を立ちバックというのは、前にお姉さんから教わってる。

前に立っているラグビーのチンチンは、くちびるにおしつけられて素直にくわえた。

ズニズニ、ゆさゆさ、ジュブジュブ……

身体が前後にゆさぶられ、マンマンと口の中でチンチンが出入りする。もう、ちっともいたくないし、口の中の気色悪さにも慣れた。マンマンは、ちょっとは気持ち良い感じだけど、電気にたとえるなら100ボルトかな。

本当に感電したら100ボルトでも死ぬけど、これは100万ボルトとの比かくだから。でも、他のことでは感じられない気持ち良さだから、まあいいか。何がいいんだろう？

最初に比べると、2人ともなかなか放出しなかった。10分近くかかったんじゃないかな。口の中に出された精液は量が少なかったし、舌ざわりもうすかった。ので、ゴクンしても、のどがイガイガにならなかった。

2番手は、箱ブランコのふたり。クリトリスとチクビを可愛がってくれたから、期待してたんだけど。

「いぎいっつ」

マンマンじゃなくて、アナルに入れられた。

「も`ぼお`お`……」

ほとんど同時に、口にも強引につっこまれた。

パンパンパンパンパンパン……

じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ……

ものすごい勢いで、前も後ろも出し入れされる。

ちっとも気持ち良くない。いたくて熱くてゲエしそうになった。

でも、3分くらいで終わってくれたので、ホッとした。

まったく休ませてもらえずに、シーソーの3人が、あたしを囲んだ。

「お願いします。チクビとかクリトリスとかも、可愛がってください」

してほしいことは、ちゃんと言わないとね。

「それは無しでいってください」

カメラマンの冷たい指示。

「いやがっている少女を暴行するコンセプトで行きます。アへられたら台無しですから」

ちえええ……どころじゃなかった。

「それじゃ、本当の意味で泣かしてやりなさいよ、^{いわした}岩下さん。ユウちゃんの望み通り、チクビとクリトリスを可愛がってあげなさいよ。コンセプトにしたがってね」

「へ……？」

「つまりね……」

お姉さんは、あたしに横から近づくと——チクビにつめを立てて、180度もねじった。

「いたいっっ……！」

するどいゲキツウが、チクビで暴発して頭の天辺でまでつきぬけた。

「分かった？」

年下皮ジャンさんは親分をふり返った。親分は苦笑しながらうなずいた。

「いいんですね？」

念をおしてから、年下皮ジャンさんは、あたしの横に立った。

他の2人が、それぞれにあたしのアナルと口にチンチンをつっこんだ——ところで、カメラマンが、ダメを出した。

「ヴァギナの方にしてください」

少しはマシかなと、落とした1円玉を拾ってくれたくらいには感謝したけど。とっておきの500円玉をふんだくられた気分になった。

「アナルには、これを入れましょう」

シーソーに取り付けられてたスリコギの、太い方。それをアナルに送入された。細い側を入れられたのかな、わりとかんたんに入ったんだけど。おしこんでいる手がはなれると、ニュルンとぬけ出そうになる。のは、マンマンに送入した人が手で支えた。

その作業(?)が終わってから。年下皮ジャンさんは、二つのチクビに軽くつめを立てた。これくらいなら、いたくもかゆくもないんだけど。

「それじゃ、この絵がクライマックスだな。気合を入れて、ギャン泣きさせてやれ」

親分が非道いことを言った。あたし、親分をきらいになった……あれ？ それじゃ、これまででは好きだったってこと？ まさかね。パパに借金を重ねさせて、ママのわすれ形見の家を取り上げようとしてた人だよ。あたしをうらビデオ女優に仕立てた人だよ。

なんて、余計なことは考えられなくなった。

パンパンパンパン。ニュブニュブニュブニュブ。マンマンと口の中でチンチンが暴れ始めた。後ろからマンマンを犯している人のおなかが、スリコギをおしこんでくる。それも、いたいんだけど。

チクビにゲキツウが走る。身体が前後にゆれて、チクビが上下に引っ張られて、ゲキツウが100万ボルトにはね上がった。

「も`ぼお`お`お`……ん`み`ゃあ`つつつ！」

車のクラクション以上に大きい(かもしれない)悲鳴は、チンチンにふさがれて……それでも、ふつうの大声くらいのボリュームだろう。

「秀英、情けをかけるな。急所をわすれているぞ」

「手は3本もないわよ。わたしも手伝ってあげる」

お姉さんが、あたしをはさんで年下皮ジャンさんの真向かいに立った。

「ちょっとストップ。ゆれてちゃ、うまくつまめない」

2人の動きが止まって。お姉さんがワレメを逆なでしてクリトリスをさぐり当てた。

「ひいひいっっ！」

ハリをつき差されたんじゃないかと思うほどのゲキツウが暴発した。女の人ってつめの
手入れをしてるから、それだけ先単がするどくなってるんだろう。

「はい、OK。うんとはげしくピストンしてあげてね」

パンパンパンパンパンパン……

じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ……

「んゝみゝいゝいゝいゝっっ……もゝぼおゝおゝっっ……！」

アナルのいたみも、口の中の気色悪さも、チクビのゲキツウさえも、どこかへ消し飛ん
でしまった。クリトリスのマイナス10億ボルトの大々々ゲキツウだけしか感じられない。

ナミダがボロボロこぼれるというか、あふれる。

「いやあっ！ これだけは許してください！」

あたしは顔を左右にふって、なんとかチンチンをはき出した。絶きょうでうったえた。
お願いした。

でも、聞いてもらえなかった。

頭を両手でおさえこまれて、またチンチンを口におしこまれた。

「んゝぼおゝおっ……んゝみゝやあゝあゝあゝっっ……！」

あたしのくぐもった悲鳴は、アスレチックフィールドの広い空間に、ただすいこまれて
いくだけだった。

積極的な口止め

ずいぶんと非道いことをされたと思っていたけれど、数日も経つと、最初と2回目との方が、ずっと心のキズが大きいと思うようになった。

フィールドアスレチックでのさつえいは野外だったから、はずかしさは一番だったし、それまでは共演(?)男優が1人だったのに、7人にも増えて、それだけたくさんセックスをさせられたけど。「初めて」は、何もなかった。いわば応用問題みたいなもの。基本が分かっていれば、必ず解ける。

チクビとクリトリスを、あんなに残逆にいじめられたのはショックだったけど。なんدهかな。あのときのことを思い出すと、そこがジンジンしてきて……自分でいじっちゃうんだ。そうすると、1万ボルトくらいのスパークが発生して、むね全体がキュウンとなって、マンマンからねばっこいあせ(?)がにじみ出る。

月曜日は学校を休んだ。マンマンとアナルがヒリヒリズキズキしてたので、絶対に変な歩き方になると思ったから。あたしが休んでいるのはさつえいのせいだし、その大元の原因を作ったのはパパ——は、さすがに外出(パチンコか競馬か競輪)せずに、ハレモノにどうやってさわったら良いかオロオロして、ずっとテレビを観ていたんだろう。あたしは、部屋にとじこもってたから。

火曜日からは、(無理にでも)ケロリとして登校。学芸会に向けての練習も本格化してきて学年ごとに下校時間がずれてきたので、集団下校は中断された。低学年の子だけは6年生の一部が付きそってグループ下校だけだね。

土曜日の放課後は、1時間ほどクラス発表の演げき『こんきつね』の練習があつて。それから1時間は、グループごとの出し物の準備。あたしは、ユニちゃん他5人で出すモギ店の商品をせっせと作った。といっても、男子の発案で「中返り飛行機」とか「ぶっ飛び

アロー」なんて折り紙飛行機と、輪ゴムをつないでわりばしにくくり付ける「カタパルト」だから、折りヅルやマリよりもかんたんだけどね。

「飛ばしてみても調整しよう」

自分で作った紙飛行機を手に、てんでに校庭へ——行くと中で、6年生の垣井翔太さん^{かきいしょうた}に声をかけられた。5年生でとなりのクラスの三田秀夫くん^{みたひでお}と原田智紀くん^{はらだともき}もいっしょだった。

「ナイショの話があるんだけど、来てくれるかな」

なんだろう。3人ひとかたまりなら、告白とかじゃないよね。

「今いそがしいので、こまります」

垣井さんがあたしの耳元にささやいた。

「ちょっとだけだから。ショウコウジョ、ユウちゃん」

頭が真っ白。心ぞうがでんぐり返った。

手を引っ張られても逆らえなかった。ユニちゃんたちの目線も気にしているどころじゃなかった。

連れてかれたのは、こういう場合（どういふ場合か分かってない）の定番、校舎のうら側。

「オレ、見ちまったんだよ。『しょうこうじょユウ〜ミシオのハカ』って、キミのことだろ？」

未潮はミチョウって読むそうだけど。茶末事だ。

「だったら、どうだっていうの？ 先生に言いつけるつもり？」

しらばくれてもムダだと思ったから、ふだんの可愛い子ぶりっこ（してるつもり）はやめた。

「言いつけるか言いつけないかは、ユウちゃんの出方次第だね」

これまでで一番ムシズの走る「ユウちゃん」だった。あたしは垣井くんをにらみつけた。

「オレたちにもハダカを見せてくれよ。そしたら、先生にも親にもだまっというやる」

クソ親父に言いつけられたって平気だけど。先生は、まずい。

ああいうことをするのは、不良少女だ。シセツに入れられたりしたら、残り二百万円を返せなくなる。ママの家を取り上げられてしまう。

あ、でも。

「そのビデオ、どこで見たの？ ビデオ屋さんでは売っていないし、売っててもあなたに買えるはずがないでしょ。お父さんがかくし持っているのを、ぬすみ見たんでしょ。言いつけるわよ」

反げきは、まずかったみたい。

「いいぜ。言いつけてみろよ。オレはおしりペンペンくらいですむけど、おまえはタイホされちゃうぞ」

ギクツとした。それは、まったく考えていなかった。あんなビデオって、ワイセツ物だよ。ケイサツに言いつけられたら、タイホされて、シセツどころじゃない。けい務所へ入れられちゃう。

くそ。こいつらの言いなりになるしかなさそうだ。

「分かった。ハダカを見せれば良いのね？」

あたしは、服をぬぎにかかった。そしたら、3人が3人とも、あわてて止めた。

「ここじゃこまる。いっしょに家まで来てくれよ」

「あなたの家へ？ それこそ、家の人に見つかるでしょ」

「だいじょうぶ。うちは共働きで、父さんは夜まで帰らないし、半ドンでも母さんはかえって急がしいくらいなんだ」

つまり。だれもいない家で、じっくりとあたしのハダカを見たい（だけかな？）ということだ。見られようとさわられようと、かまやしない。どうせ、オトナの男どもによごされてしまった身体だもの。

とつ然にグループからぬけたりしたらあやしまれるから、モギ店の準備は最後まですませてから。校門で待っていた3人……じゃ、なくなっていた。

6年生の^{たませ??}玉瀬雅樹、5年生の^{いちのふみたけ}市野文武、^{しのだひとし}篠田仁志、^{きすえとらぞう}木末虎三の4人が増えていた。名

札にフリガナまでは書いてないから、(同学年の子は、だいたい覚えてるけど) 雅樹をなんて読むのかは分からない。どうでもいい。

全部で7人か。フィールドアスレチックのサオ役(十年下皮ジャンさん)と同じ人数だな。なんとなく、そんなことを思った。

7人は、にがしてたまるものかって感じで、あたしを取り囲んだ。まるで、VIPか強悪犯かってあつかいだ。

あたしの家は学校の南方向だけど、智紀くんの家は北東。

「おじゃまします」

だれもいないのに(いたらこまるのに)、みんなわざわざあいさつしてから家に上がった。さすがに智紀くんは「ただいま」なんて言わなかったけれど。

なるほど、これは夫婦共働きじゃないとローンを返せないだろうなっていうくらいの広さだった。ので、リビングルームも広がった。あたしんちはLDKっていうくらいだから、リビングとダイニングとキッチンとが、智紀んちのリビングルームと同じくらいの部屋にひとまとめ。

その広いリビングルームで、下校時と同じくらいの間かくで取り囲まれた。

「もっと広がってよ。ソファーだって、あるじゃない」

7人をちょっとだけ遠ざけて。あたしは、とつとと服をぬいだ。親分とか3号お姉さんとかだったら、「色気が足りない」とか「もっとはじらいを」とかダメ出しをすると思うけれど。この7人は、それどころじゃないよね。

「これで満足した？」

両手をコシに当てて、気取ってみせた。実は、ものすごくドキドキしてる。さつえいはビジネスで、これはプライベート。というだけでなく。同じ年ごろの男子にハダカを見られるのは、うら女優になる前と同じくらいにはずかしい。

「そそ、それくらいで……満足するかよ」

垣井くんが、しもろどもろで言い返した。

「もっと良く見せろよ」

あ、これは、もしかして。あたしが主導ケンをにぎれるかもしれない。そしたら、お願いじゃなくて命令で、口ふうじできるかな。

「これなら、満足？」

ソファで身を乗り出している垣井の鼻先へオマタをつきつけて、足もたっぷり開いてあげた。

「お、おお……」

鼻息が、もろにワレメをくすぐった。ちょっと気持ち良いかな。

おどされて、いやいやハダカになってるんじゃないくて、あたしの方から見せつけてやっている。そんな気分になってきた。

「ボクにも見せてよ」

「ボクがビデオを見つけたんだから、ボクが先だ」

めんどくさいな。リビングのあちこちに散らばってる7人に順ぐりに見せてまわるだなんて。というのは、垣井くんの提案で省エネできた。

応接セットの小さなテーブルから、タバコ入れだのペンケースだのをどかして。あたしが、その上にねそべった。ひざから先が、テーブルの外にたれる。

わっと、全員があたしを取り囲んだ。

「もっと足を広げてよ」

おしくらまんじゅうで、3人ほどがオマタをのぞきこむ。

「こうなってるんだ」

「まだ毛が生えてないのな。ガキだね」

「なんか、オシッコのにおいがする」

せっかく見せてやってるのに、好き勝手なことを言いやがる。

「なあ。ちょっとさわってみてもいいかな」

アジト(?)を提共した智紀くんが、遠りょがちに聞いてきた。

「強白して言うことを聞かせてるのは、オレたちだぞ。おうかがいなんて立てる必要はない」

くそ。垣井くんを何とかしなくちゃ……

ピクッとコシがふるえたのは、いきなりワレメに指を入れられたから。でも、ちっとも気持ち良くない。アナではなくて、そのまわりの肉を指先でつついてる。

「オッパイは、ユニの方がふくらんでるよな」

そんなことを言いながら、文武くんがむねのささやかなふくらみをつまんだ。

「ユニちゃんは関係ないでしょ！」

思わずさけんで、言い方をまちがったと、すぐに反省した。「ユニに手を出さない代わりに……」なんて、強白の材料にされかねない。

「あたしのハダカで満足しないんだったら、もういいわよ。見せてあげないから」

本気だと思わせるために、身を起こした。

「おこるなよ。比べるために言っただけだろ」

「それなら、いいわ。でも、他の子と比べられるのはいやだよ」

あたしは、またテーブルの上であお向けになって。見えやすいようにと、ひざを立ててコシをうかしてやった。

「こんなことをしてあげるのは、あたしだけなんだからね」

それから、ひとしきり。14本の手が、あたしのオマタとむねをさわりまくった。ちゃんとアナをさぐり当てて、指を入れてくる子もいた。チクビをクリクリもんだりひねったりもする。

でも、ちっとも電気が走らない。クリトリスを知らない子ばかりのせいかもしれない。

たぶん、女の子のワレメを間近に見るのは、初めてなんだろう。

どの子も、半ズボンの前をつっぱらかしているけど、それがどういう意味を持つのかすら、知らないんじゃないかな。

もしも。ちゃんと精液を放出させてあげたら、興味が満足するかな。

「男の子って、損だよな。Hな気分になってるって、すぐ分かったやうもの」

右横にいた玉瀬くんの半ズボンに手をのばして、テントになってる部分をくすぐってあげた。

「わっ……何するんだよ?！」

玉瀬くんが、あわてて身を引いた。

すごく新先な反応だ。親分でもサオ師さんでもサオ役でも、ここぞとばかりにおしつけてくるんじゃないかな。ウブでじゅん情で……ガキだ。

感外にひたってるヒマはない。あたしはテーブルからすべり下りた。足元にしゃがみこんでいた垣井くんの前にひざまずいた。

「なんだよ……?」

言う前に立ち上がってくれたので、手間が省けた。半ズボンを一気に、ブリーフもいっしょに、ずり下げてやった。

うわ、可愛い?

すっかり、オトナの（ボッキした）チンチンばかり見てきたものだから——ナスビとミニウインナーくらいにちがう。ミニウインナーだから先っぽまで皮にくるまれている、ちょっと皮が余っているのはアサガオのツボミみたいだ。

このままくわえても良いのかな。試しに、指でそっとむき下げてみた。

クニョンと、ミニサイズのキトウがすがたを現わしたんだけど。カリクビのまわりが、つぶれたトウフみたいな白いカスでよごれている。魚のアラがくさったようなにおいがしている。

テーブルの上からソファーに移したティッシュを取って、ぬぐってみた。これ、アカかもしれない。ふけつなアカまみれのチンチンなんか、さわるのもイヤだ。

「ねえ。チンチンをあらってきてよ」

「……なんで?」

「いいこと、してあげるから」

売り言葉に買い言葉。それとも言葉のアヤマチ？

垣井くんは、バタバタと部屋から出て行って、1分かそこらでもどって来た。下半身丸出しで、チンチンはぐしょぬれ。いちおう、白いアカは落ちていた。チンチンはデスター総統バンザイどころか、外人プロレスラーみたいに、イチバーンしてる。

あたしは、また垣井くんの前にひざまずいたけど、上からくわえるのはむずかしい。ので、ソファーにすわってもらった。うんと足を開いてもらって、その間にひざ立ちして。顔をふせて、真上からチンチンをくわえた。

「うわっ……何すんだよ?!」

こうするのよ——と、短いサオをアムアムして、小さなキトウをペロペロして、本当に太い目のストローだなど思いながら、くちびるとサオのすき間を調整してズゾゾゾゾーッとすすった。

「うわ、わわわ……ああっ?!」

口の中で、チンチンがビュクビュクツとけいれんして。ピュピュッと勢いは一丁前だけど、少量の精液がのどのおくにぶつかった。

「すげえ……今の、なんだよ？ 何したんだよ？」

そうか。女の子に初朝があるように、男の子にも初精(?)があるんだな。

あたしは精液を舌の先に集めて、口を開けてみんなにも見せた。

「精液よ。赤ちゃんの種。これが……女子のマンマンの中で、赤ちゃんに育つのよ」

なんかちがってるような気がしたけど。女子だけの保健授業でも、オシベとメシベしか習ってない。あ、そうだ。

「でも、あたしは生理が始まってないから、いくら種をまいても、赤ちゃんはできないの」
最初のさつえいで親分から教わった知識をひろうした。

赤ちゃんって言葉を聞いたときに、ギクツとした顔になってた垣井くんが、ハフウウと安心のため息をついた。

そりゃ、そうだよね。あなたのせいで赤ちゃんができちゃった、どうしてくれるの。な

んて、テレビドラマでもやってたものね。あれって、つまり、放送はされないけど、ドラマのうら側ではセックスをしてるという設定なんだよね。これからは、シラフでドラマを見れないや。

「フェラチオしてほしい子は、チンチンをあらってきてね。ちゃんと皮をむいて、キトウとカリクビをきれいにしてね」

われ先にと、6人が部屋からかけ出て行った。引き戸の所でぶつかってやんの。

こうなったら、とことん仕切ってやろう。

ビデオを見つけたと言ってた秀夫くんを最初に指名した。チンチンをくわえるのと、チンチンがビュクビュクッとなるのが、ほとんど同時だった。でも、精液は放出されなかった。あたしが未朝なら、秀夫くんは未精ていうのかな。

次に、アジトを提共した智紀くんを指名したら、6年の玉瀬くんが文句を言った。

「オレのが上級生だぞ。先にしろよ」

「あんたなんて、ただの野次馬じゃない。野次馬の中じゃ一番にしてあげる」

「先ばい、ごめんなさい」

なぜか、智紀くんが謝ってる。

そんなことは気にせずに——パッコン、アムアムペロペロズゾゾゾゾー。きっちりボッキしてるのに、5分以上続けても、ビュクビュクッてならない。

「もう、いいよ。すごくHで気持ち良いけど、後がつかえてるから」

玉瀬くんに遠りよしたのかな。

その玉瀬くんは、ちつとも遠りよしなかった。どころか。

「フェラチオってのは、前技だろ。それくらいは知ってるぞ」

本番のセックスをさせろと要求してきた。

まあ、いいか。ていうか。こんな細くて短いチンチンじゃ、いたくもかゆくも（きつと気持ち良くも）ないだろうね。

「うん、いいよ」

3人用のソファーじゃ、背もたれがじゃまになりそうなので、カーペットの上で、ゴロンとおお向けになった。足を開いて、ひざを立てて。はい、どうぞ——とまでは言わないけれど。

このリビングルームは、広いだけじゃなくてゴージャスだ。丸いけい光灯が四つの下にガラスのかざりがたれていて、シャンデリアだ。

「ねえ、セックスしないの？」

いつまでもボサッとつつ立っている玉瀬くんに声をかけた。

「お、おう」

おずおずと、あたしにおおいかぶさってくる玉瀬くん。

手をそえないでチンチンをワレメにこすりつけて——そこから、どうして良いか分からないみたい。

あれこれ助言するよりも、手っ取り早いやり方がある。

「ちょっと、どいて」

玉瀬くんをおしのけて。うわあ、男の人をおしのけようとして、素直に動いてくれたのは、これが初めてだ。あたしは身を起こした。

「あなたの方が、おお向けになって」

上級生に「くん」付けは失礼だし、でもHなことを強白してくる子に「さん」付けなんて真っ平。「あなた」で良いよね。

素直にね転がってくれた玉瀬くんをまたいで。

うん。大ズモウの仕切の形より、ひざ立ちからコシを落としていく方が、自分でものぞきこみやすいね。

左手でチンチンの根元（中ほどまでになっちゃう）をつまんで。ワレメに入れた後はコシをゆすって、アナの位置を合わせて。

チュルンッて感じで入っちゃった。おし入ってくる感覚なんて、なかった。

だけど、スカスカッて感じでもない。それなりに圧白を感じる。細くてもぴったりフィ

ットして、太くても受け入れてしまう。マンマンって、遊通無限だ。これが『女体の神ピ』ってやつかな。

「うおおおおっ……すげえ。ニュルニュルして気持ち良いや」

そんなに感げきしてくれると、うれしくなっちゃう。でも、感げきじゃカイカンの足しにならないので。

「ねえ、メスチンポをいじってよ」

クリトリスって言っても分からないかなと思ったら、最初のときに親分が言ってたのを、自然と思い出した。

「え……メスチンポ？」

「ワレメの上のはしっこに、イボみたいなのがあるでしょ。それが、女の子のチンチンなの。いじってもらえると、すごく気持ち良くなるの」

「チンチンなんて、さわりたくないよ」

しゅん間湯わかし器のメガトンミサイルがドッカン！！

「あ、そう。それじゃ、あたしもさわりたくない」

コシを上げて、チンチンをぬいてやった。

「ああっ……？」

玉瀬くんが、切なそうな声を上げた。のは、放つという。

「メスチンポをいじってくれる人には、フェラチオをしてあげる。セックスでも良いよ」

「じゃあ、オレ」

「ボクが先だよ」

「ジャンケンで決めよう」

われ勝ちってやつよね。なんか、女王様になったような気分。

「待つてよ。あやまるよ。チンチンをなめたりマンマンに入れたりしてくれてるのに、きかないなんて思って、ごめん。これじゃ、ヘビの生殺しだよ」

せいぜいがミミズのくせに——というのは、言い過ぎだね。

あたしは、もう一回、玉瀬くんを入れてあげた。

玉瀬くんも右手を上げて、クリトリスをさぐり当てて、おっかなびっくりでつまんだ。
「あんんんっっ……！」

10万ボルトくらいの電ゲキが走って、コシがはねて、おしりがストンと玉瀬くんの太ももに落ちた。

玉瀬くんは、おどろいて手を引っこめたけど。すぐに興味深々で、またつまんでくれた。

「何、今の？ 気持ち良かったんか？」

「うん！ すごくカ・イ・カ・ンだった」

サオ師さんにつままれてこねくられたよりも、良かったくらい。あのときは、いたいのとくすぐったいのと快感とがゴツチャ混ぜになってて、それはそれで、ことなる感覚がたがい際立たせるっていう——その合計が1億ボルトだったけど。なんていうかな。おしるこに塩を混ぜるとすごくあまくなるけど、雑味っていうか、ちょっとしつこいあまさになるよね。

だから、この10万ボルトは、1億ボルトよりも好きかもしれない。コシガクガクで頭ポワワンだったら、残り3人の相手ができなくなる。

「それじゃ、チンチンを出し入れするから、クリトリスを引っ張り過ぎないように、コシの動きに合わせて手を動かしてね」

教えながら。実はあたしはどんなふうにされたいのかが、良くわかった。

だけど。ビュクビュクッとするなどというのは無理な注文で。ひざを3回クッシンさせたら、そうなって。マンマンの中でチンチンがへニャッとなっちやった。

「もう、いいよ。重たいなあ、どけよ」

女の子に向かって「重たい」は禁句だよ。でも、あたしはおこらない。さっさと、どいてあげた。男の人が精子を放出したら、人格が変わったんじゃないかってくらいに、H気分もいじめ心も雲散夢消するって、さんざん学んでる。だから、さつえいのときは助かってる。物足りなく思うときも……ええと、どうだったかな。

とにかく。次こう、次。

ジャンケンで勝った文武くんに女上位のセックスをしてあげてクリトリスをいじってもらって。10万ボルトで20秒。ビュクビュクッとはなったけど、放出はなかった。

自分でマンマンに指を入れてみて分かったんだけど、玉瀬くんも放出してなかった。まだ精液が出るところまで成長してないんだ。バカにしてるんじゃない。あたしだって、生理がまだなんだから。別の血は、わんさか出ちゃったけど。

それはともかく。仁志くんと虎三くんは、フェラチオの方の望んだので、ちゃんとサービスをしてあげて、おしまい……には、ならなかった。

「あのさ。やっぱりさ。オレもセックスをしたいんだけど」

垣井くんがおずおずと切り出すと、秀夫くんも同調した。

「ボクも、お願いします」

わ。男子からケイ語で話しかけられたなんて、初めて。よしよし、願いをかなえてつかわす——なんて気分になっちゃう。

「いいよ。それじゃ、先ばいからね」

あお向けになった垣井くんをまたいで、チンチンをはめて、コシを動かす。ついさっき放出したばかりだからかな。すぐにはビュクビュクッてならない。ひざをクッションさせていると、セックスをさせろと言い出した玉瀬くんが、またよく張りなことを言いだした。

「それが終わったら、オレにもフェラチオをしてくれよ。前技じゃないけど、後技ってやつだよ」

ふうう。この調子じゃ、セックスをしてあげた子にはフェラチオ、フェラチオの子にはセックスをしてあげなくちゃならないかな。順ぐりにやってると、時間がかかる。智紀くんのママが帰って来ちゃうかもしれない。

「それじゃ、あたしの前に立って。先ばいをまたぐことになるけど、いいでしょ？」

女上位のセックスをしながら、同時にフェラチオ。犬のセックスの形では、サオ役さんたちにやられているけど、この形では初めて。

ひざをクッシンさせてズニズニとチンチンをマンマンに出し入れしながら、パッケンアムアムペロペロ。ああ、まだアナルが空いてるなと思ったけれど、もちろんだまっていた。ウンチの出るアナにチンチンを入れるのは、ふつうに考えればエンガチョでビビンチョだもの。あたしから説得してお願いする気なんて、さらさらない。

垣井くんはクリトリスをつまんで、あたしの動きに合わせてうでを動かしながら、クニクニもしてくれたけど。クッシン運動を続けてると、物足りなくなってくる。ので、コシを左右にも（少しだけ）ふってみた。クニクニが、クニルンクニルンで感じになって、10万ボルトから30万ボルトくらいになった。

「うわ……」

垣井くんも気持ち良くなるみたい。

セックスをしてる垣井くんが先にビュクビュクッとなったけど、玉瀬くんはまだ。フェラチオをしながら、下の人に入れ代わってもらうのはむずかしいし、あまりに流れ作業的で情ちょうがない。玉瀬くんもビュクビュクしてから、次の2人に取りかかって。

おおむね、一発目を放出（空打ちの方が多い）した順番で、2本ずつをやっつけた。

これで満足したでしょ。あたしはバスルームへ行って、シャワーで全身を流して。きちんと服を着てからリビングへもどった——ら、なんかモヤモヤっぽい分囲気になった。

「これで終わったと思うなよ」

垣井くんが、生意気（なんて、下級生がいうことの方が生意気だけど）な態度にもどった。

「これからは、オレたちのよび出しに応じるんだぞ」

弱みをにぎられたら、とことんしゃぶりつくされる。ヤクザ屋さんの先売特許じゃないのね。でも、あたしだって強く出るよ。

「週に1回だけね。それと、うらビデオのお仕事が入ったときは、そっちを有先する。それで、良いわね」

「お、おう……分かった」

うん。主導ケンを取り返しかけてる。

「当たり前だけど、絶対のヒミツだよ。友達をさそうのもダメだよ」

「う……ん」

「あのう。ちょろっと話をしてるやつがいるんだ。今日は来なかったけど……」

秀夫くんは図々しいな。でも、あたしのビデオを見つけた人だから……あ、そうだ。

「それじゃ、今は7人だから、あと4人だけは増えて良いよ。そしたら『11人いる?』になるから」

「へ……? うん、分かった」

とっさのネタは通じなかったみたい。

「だれを増やすかは、7人で相談して決めてね」

めでたし、めでたし。

11人が相手でもガキチンチンが相手じゃ苦にならない。快感も少ないけど。

あれ……? オトナのチンチンにつっこまれるのが快感だって、いつから思うようになったんだろ。まあ、それもクリトリスを可愛がってもらってのことだけど。

オトナにいじめられるよりも、ガキに君リンする方が面白い。あまり楽しくはないけど。

あれ、あれれ……? 面白いのと楽しいのと、どちらがうんだっけ。ええと、オトナに可愛がられたり（Hな意味で）いじめられたりするのには、面白くないし楽しくもない。でも、快感がある。

ややこしいから、考えるのはやめておく。

あと2本に出演したら、借金はチャラになってママの家を守れるけど、同級生たちとのHな遊びは卒業まで続くんだろうな。

※続きは製品版でお楽しみください。